

新座市をキャンパスに！

＋(プラス)となる人づくり、街づくり

平成26～30年度 最終報告書

地(知)の拠点整備事業

目次

発刊のことは	02
I 十文字学園女子大学 地(知)の拠点整備事業	
1 概要	03
2 推進体制	04
II 教育	
1 地域志向教育カリキュラムの構築	05
2 地域志向科目の拡充	05
3 「学びのPDCA」による自立型学習の確立	06
4 地域活動に関する学生アンケートの実施	07
5 地域貢献を学びと結びつけたPBL型授業の取り組み	07
III 研究	
1 地域志向教育研究費による研究プロジェクトの公募	08
2 平成30年度 採択研究プロジェクトの実績報告	13
3 「地域志向教育研究プロジェクト研究成果論文集2014～2018」の発行	33
4 地域貢献を学びと結びつけたPBL型研究の取り組み	33
5 地域連携共同研究所による地域志向研究	33
IV 社会貢献	
1 産官民学連携による社会貢献活動	34
2 PBLによる社会貢献活動	35
3 学生による社会貢献活動	35
V その他の取り組み	
1 意見交換の場	37
2 成果の公開	38
3 FD・SD研修	40
4 広報活動	40
5 ボランティアセンター	40
VI COC事業評価	
1 自己点検・評価	41
2 外部評価	42
VII COC終了後の組織体制	
1 組織の改編	46
2 新組織体制のねらい	46
VIII 資料	
1 新聞掲載記事	47
2 広報にいざ(新座市の広報紙)	51
3 自治体等のホームページ	54
4 その他のメディア	55

発刊のことば

十文字学園女子大学 学長 志村 二三夫



平成26年度に採択された「十文字学園女子大学 地(知)の拠点整備事業(COC事業)」は昨年度で終了しました。この間、地元新座市を中心とする地域との永年の絆をベースに、「新座市をキャンパスに!+(プラス)となる人づくり、街づくり」を合言葉に、幅広く力強い連携協力につとめ、Center of Community(地域の知の拠点)となれるよう取り組みました。この冊子は5年間の事業内容や成果・評価を取りまとめた最終報告書です。

多彩な取り組みの中でも、地域を学ぶ、地域で学ぶ、地域に活かすという視点で編成された地域志向教育カリキュラムにより、学生達は地域の皆様を先生として成長し、社会人基礎力を高めました。逆に、学生達の若さ・明るさ・優しさや、しなやか・大胆なアイデアは、ささやかながらも地域の元気に役立ったと自負しています。教職員の意識も大きく変容しました。この報告書からそうした様子を汲み取って頂ければ幸いです。

地域課題解決への貢献は、地域に根ざし歩む本学の大切な使命です。新座市がめざす快適みらい都市のルーツは、この報告書にも登場する野火止用水による、荒れた台地を肥沃の地への築きです。野火止用水は、知恵伊豆こと松平伊豆守信綱のもとで、多くの人々がChieをしほり、Communicate(情報共有)し、Conceive(構想)し、Collaborate(協働)し、Challengeした成果です。Chieは課題解決に求められるデザイン思考の源泉です。

COC事業は昨年度で終了ですが、地域課題解決への貢献には、野火止用水を貫徹させた先人のように、いくつかのCを束ねたCOC^xとして骨太で持続可能な取り組みを進めなくてはなりません。それには、本事業における貴重な経験や成果を糧に、新座市はもとより、より広く浸透・波及して近隣地域の課題解決に活かせるよう、取り組みの一般性も求められます。それらの萌芽や片鱗も本報告書に示されています。この報告書は、こうした持続性・一般性の観点も含めて、このCOC事業の成果を総括し、COC^xへと繋ぐ重要な資料でもあります。最後に、本事業にご支援・ご尽力頂いた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

新座市長 並木 傑



十文字学園女子大学が平成26年度から本市と連携して取り組んでこられました「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」は、平成30年度をもって5年間の事業年度が終了となりました。

貴大学には、本市をフィールドとした多分野にわたる研究や地域活動を展開していただいたことに心から感謝申し上げます。

本市が掲げる「住んでみたい ずっと住み続けたい 魅力ある快適みらい都市」の実現に向けた取組については、市が一丸となって取り組んでいくことが必要であり、その中で、様々な知見や人材を有する大学との連携は、目指すまちの実現への大きな推進力となります。

この5年間の取組を挙げましても、「十文字学園女子大学 COC事業に係る新座市との意見交換会」(地域連絡協議会)や「+(プラス)キャンパス連絡会議」を始めとする意見交換の場を数多く設けていただいたほか、「新座っ子ばわーあっぶくらぶ」や「子どもの放課後居場所づくり事業(ココフレンド)」を始めとする様々な市の事業において連携を深めていただき、正に活力ある地域社会づくりに大きく貢献していただいたと捉えております。

今後につきましても、大学のシーズ(知的資源)と地域のニーズ(課題)の的確なマッチングを図る中で、更なる連携の輪が広がっていくことを御期待申し上げますとともに、貴大学のますますの御発展を祈念いたしまして、本報告書の発刊に当たっての御挨拶とさせていただきます。

I 十文字学園女子大学 地(知)の拠点整備事業

1 概要

「地(知)の拠点整備事業(大学COC<Center of Community>事業)」(以下、COC事業)は、自治体等と連携し、地域を志向した教育・研究・社会貢献を積極的に進める大学を国が支援する事業です。大学が地方創生を担う地域の「知」の拠点となり、産学官民を越えた連携を生み出して、様々な問題解決に取り組み、さらには地域に必要な人材の育成を目指すものです。

本学は、平成26年度にCOC事業の採択を受け、「新座市をキャンパスに!+(プラス)となる人づくり、街づくり」をテーマに、新座市を中心としたエリアを学外キャンパス「+(プラス)キャンパス」として事業を展開し、この取り組みを通して得た経験・知見を近隣の連携自治体に広げていくことで、活力ある地域社会づくりに貢献することを目指しています。

- ◆ 事業期間 平成26年度～平成30年度
- ◆ 十文字学園女子大学 COC事業のイメージ

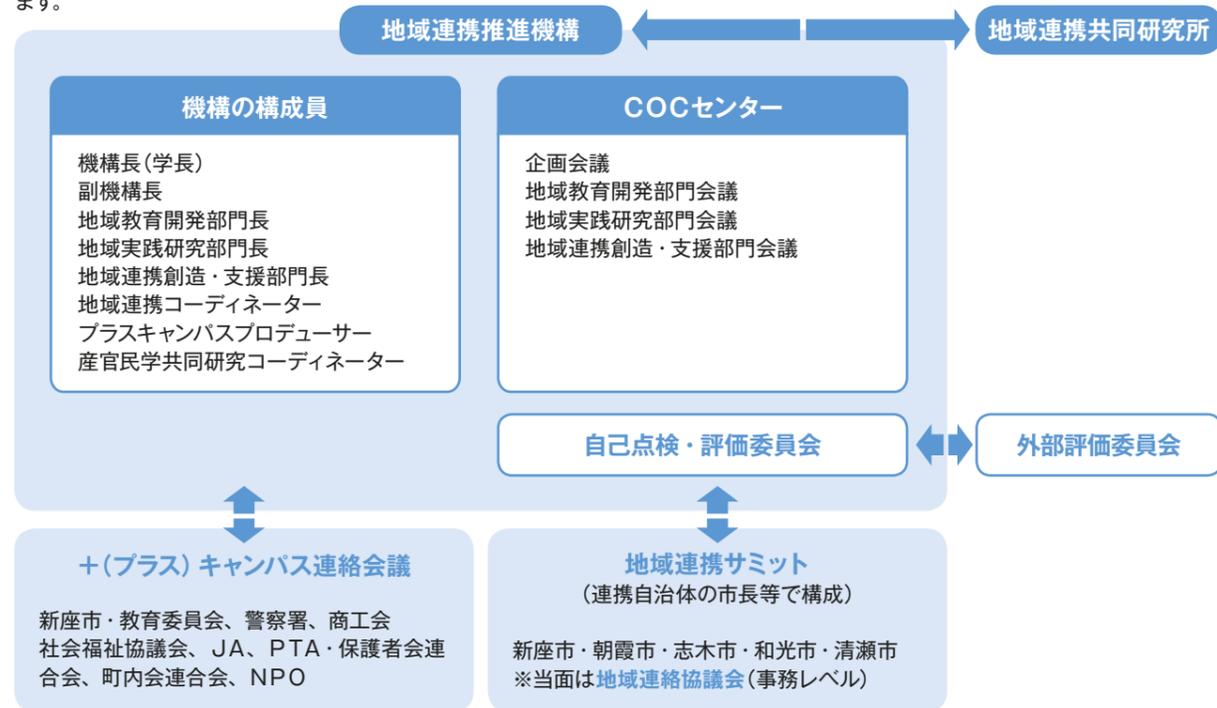


2 推進体制

現有の教育研究組織や大学開放・地域連携推進センター、学科、個々の教員が取り組んできた地域貢献の実績を集約し、学長のリーダーシップに基づいた全学的な取組として再構築した地域連携推進機構を平成26年1月に設置しました。機構は学長をトップとし、地域連携活動の実績を有する教員、事務職員並びに専従職員とした地域連携コーディネーター等から構成しています。

また、教育、研究、社会貢献の推進の基盤となる「地域教育開発部門」「地域実践研究部門」「地域連携創造・支援部門」の3部門を設置しています。

さらに、産学官民の連携を推進するための会議体として、「+（プラス）キャンパス連絡会議」と「地域連絡協議会」を設置しています。



地域連携共同研究所	研究分野、組織を超えた連携により、本学及び地域社会の発展に貢献する地域志向研究を深化させる新たな研究組織(所長:学長、H27.4.1設置)
+ (プラス) キャンパス連絡会議	地域の声やニーズを的確に把握するために設置
地域連携サミット (地域連絡協議会)	包括連携協定を締結している5市(新座、朝霞、志木、和光、清瀬)の市長及び教育長で構成する「地域連携サミット」を設置し、各市の現状、課題、本学への要望等について定期的に意見交換(当面は、事務レベルの職員で構成する地域連絡協議会がその役割を担う)
地域連携コーディネーター	地域からの要望(ニーズ)と本学の資源(シーズ)のマッチング活動を行う。
プラスキャンパスプロデューサー	+ (プラス) キャンパスで行う学外での教育研究活動や地域貢献事業等の企画・実施の役割を担うとともに、学内外の調整役も果たす。

◆地域自治体との連携体制の構築

- 持続的な地域連携を継続していくために、連携自治体と包括連携協定を締結して、活動基盤を強固にしています。

(包括連携協定を締結した連携自治体)

- 新座市 平成19年12月21日
- 和光市 平成21年10月13日
- 朝霞市 平成25年6月28日
- 志木市 平成25年8月1日
- 清瀬市 平成27年4月7日

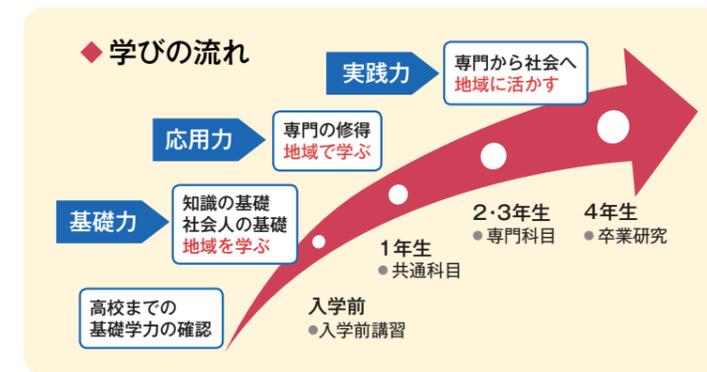


II 教育

1 地域志向教育カリキュラムの構築

本学の目指す人材像である“地的好奇心”に満ちた、活力・実践力のあるpro-act型学生を育てるための地域志向教育カリキュラムとして、「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」「地域に活かす」の領域で教育課程を構築し、「学びのPDCA」による自立型学習の確立を目指しています。

具体的には、「地域志向科目」を共通科目と専門科目に反映した新カリキュラムを開発し、平成27年度から実践しています。1年次の「地域を学ぶ」、2・3年次の「地域で学ぶ」、4年次の「地域に活かす」の3つの柱からなります。



2 地域志向科目の拡充

◆地域志向科目

地域の課題等の認識を深め、解決に向けて主体的に行動できる人材を育成するための科目

5科目(平成26年度) → 78科目(平成27年度～)
共通科目16科目、専門科目62科目

年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
地域志向科目の延履修者数	5,386人	6,470人	6,906人

(「地域に関する学修」の学習例)

地域を学ぶ	知る = 地域に関する学修について興味・関心を持つ 考える = 地域をめぐる課題を考える
地域で学ぶ	調べる = 「新座」を調査対象とし、各グループで調査を進める 関わる = 実際に現地に赴いたり、インタビューを行ったりする
地域に活かす	発表する = 調査結果を報告し、提案型のプレゼンテーションを行う 実行する = 地域の課題解決に向け、自分たちができることを実行する

(共通科目)

- 入門ゼミナール
大学の新しい環境に慣れ、その学びを充実することを目的として、グループワークやフィールドワーク、発表、プレゼンテーションなどの活動を通して、主体的に学ぶ姿勢や技能、学びの方法(スタディスキルズ)を修得する。
- 地域で学ぶ
主に新座市で活躍されているゲストスピーカーを迎えて、新座市の歴史や特徴、商工業、観光資源、伝統芸能、子育て支援活動などについて学ぶ。
- 埼玉の地理・歴史・文化
新座・朝霞・志木・和光の4市を中心に、県内で活躍するゲストスピーカーによる講義を展開する。

※地域志向科目の授業を通じた地域活動への参加

- 講義に関連する様々な地域活動に実際に参加することで、地域の理解をより一層深めることができるように工夫
- 受講した9割以上の学生が地域活動に参加し、これを契機にボランティア活動の楽しさに目覚めてサークル活動や自主社会活動に参加する学生も増加
- 活動例：子どもに関するもの（自然体験活動、プレイパークなど）、町おこしに関するもの（ゆるキャラ®フェスティバル、町内会イベントなど）、文化ホールや西武球場など協定先の事業に関するものなど

年 度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
「埼玉の地理・歴史・文化」「地域で学ぶ」の授業を通して地域活動に参加した延学生数	56人	147人	264人	291人

- ◆ 地域学習テキストの作成・活用
 - 本学の地域連携の取り組みや、新座市の歴史・自然、行政施策などを紹介する地域学習テキスト「いいね!にいざ」を毎年度作成し、地域志向科目「入門ゼミナール」の授業などで活用
- ◆ 地域活動ガイドブックの作成(平成30年度)
 - 学生が地域連携活動に踏み出すためのガイドとして、活動の意義や社会人基礎力の育成、これまでの地域連携活動の事例紹介や活動のフィールドとして朝霞地区4市(朝霞、志木、和光、新座)の市長インタビューなどを掲載した地域活動ガイドブックを作成
- ◆ 自主社会活動の単位化
 - 学生の積極的な社会参加を促し、経験を通じた自己成長の機会を提供するため、様々なボランティア活動を「自主社会活動」として単位認定(35時間以上のボランティア活動、レポート提出、発表)
 - 活動事例
健康栄養学科ダンスパフォーマンスチームの新座市民体育祭、産業フェスティバルパレードへの出演/新座市子どもの放課後居場所づくり事業(ココフレンド)でのスタッフとしての見守り活動、学習支援、スポーツ・体験活動指導/さつまいもプロジェクト:新座産さつまいもの手作りお菓子を市イベントで販売、収益で東日本大震災復興支援など

年 度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
自主社会活動の履修学生数(内、新座市内での活動)	5人 (0人)	28人 (20人)	27人 (12人)	13人 (10人)	20人 (16人)

3 「学びのPDCA」による自立型学習の確立

- ルーブリックによる学修成果の評価
PROGによる学生のジェネリックスキル(リテラシー、コンピテンシー)の分析評価をもとに、学習の評価指標としてルーブリックによる評価基準を設定し、管理ツールであるeポートフォリオを導入して学びのPDCAを記録
- 学生向けの履修の手引き「学びのナビゲーター」(大学での学びを知ろう編、eポートフォリオを活用した学びのPDCA編)を作成・配布。平成30年度には「学びのハンドブック(学びのPDCA、eポートフォリオとルーブリック活用)」に改訂



4 地域活動に関する学生アンケートの実施

COC事業評価の一環として、学生の地域活動への参加状況や形態、学生自身が身についたと自己評価している能力を調査することを目的として、平成30年度後期オリエンテーション時に本学学生へのアンケートを実施しました。

- 調査項目：社会活動への参加の経験・形態・回数、能力育成に関する自己評価、今後の参加意思
- 「十文字学園女子大学 地域志向教育研究プロジェクト 研究成果論文集2014～2018」で報告(アンケートのまとめと今後の課題)
- 何らかの形で社会活動の参加経験のある学生が半数強、比較的多数の参加経験がある学生が1割強で、経験している学生とそうでない学生の差が見られる。
- 社会活動への参加形態は、授業やゼミ活動などの教員からの紹介がきっかけになることが多く、本学では専門の紹介機関としてCOCセンターやボランティアセンターがあるため、この間の連携体制をより拡充することが、学生の参加促進につながると考えられる。
- 大学生活・社会活動を通じた能力の伸長の自己評価では、「専門分野に関する知識・技能」、「思考力や判断力」、「コミュニケーション力」、「積極性」、「人とうまく関わる能力」について、半数以上の学生が肯定的な評価を行っている。これらの内、「思考力や判断力」、「コミュニケーション力」、「積極性」、「人とうまく関わる能力」は、コンピテンシーに相当する能力である。自己評価の結果だけでなく、相互評価や客観評価も加味して、社会活動と能力育成の関係に関して検討する必要がある。
- 地域活動への参加意思に関しては、8割強の学生が積極的な態度を示しているが、「機会があれば」という学生の割合が高いことから、大学として社会活動の機会を設ける必要があると考える。

5 地域貢献を学びと結びつけたPBL型授業の取り組み

学生の社会人基礎力の育成に繋がるPBL型(課題解決型学習)授業として、地域貢献を学びと結びつけた取り組みが行われています。

- (取組事例)
 - メディアコミュニケーション学科の授業「企画・インタビュー手法」(石野榮一教授)で新座市男女共同参画情報紙「FOR YOU」の編集協力：学生が市内事業者へのインタビューの企画立案・実践・原稿作成(H29・30)
 - 健康栄養学科高橋京子ゼミ「子供たちにニュースポーツとの出会いを提供するプロジェクト」：学生がタスポニー、アルティメットなどのニュースポーツの体験事業を大和田ココフレンドで企画・実施(H29・30)

III 研究

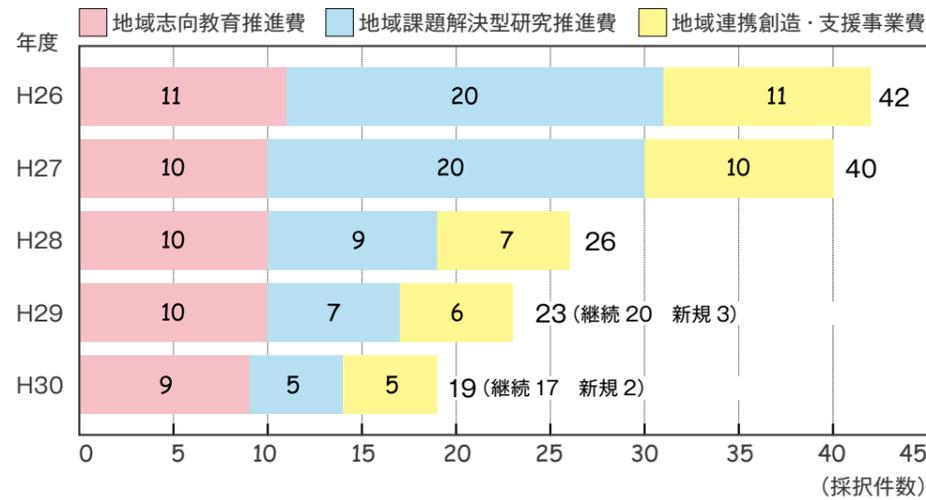
1 地域志向教育研究費による研究プロジェクトの公募

教員の地域を志向した教育・研究等を推進するため、文部科学省の補助金を活用して「地域志向教育研究費」として、毎年度700万円を予算計上し、地域教育開発部門、地域実践研究部門、地域連携創造・支援部門の3部門で研究プロジェクトの公募を実施しました。

(地域志向教育研究費の採択区分)

研究助成種目	細目	
地域志向教育推進費 (地域教育開発部門)	目的	授業を契機として学生による自主的な学びを支援し、活動を活性化する。
	概要	全学的、組織的な取組を推進するため、教員の創意工夫と自主性、自立性、及び参画意識を醸成する教育研究を支援する。
地域課題解決型研究推進費 (地域実践研究部門)	目的	地域課題を解決するために、自治体等の担当者、複数学科の教職員を構成員として、実効性のあるプロジェクト研究を推進する。
	概要	地域における活動実績がある、もしくは研究実績のある教員がリーダーとなって地域課題解決に取り組む。
地域連携創造・支援事業費 (地域連携創造・支援部門)	目的	学生が地域自治体等とともに地域課題解決に取り組む活動を支援する。
	概要	新座市、市内NPO、ボランティアグループ等との連携による地域課題解決型教育・研究活動を行う。

◆ 年度別の採択状況(研究活動の全学的展開から研究の深化へシフト)

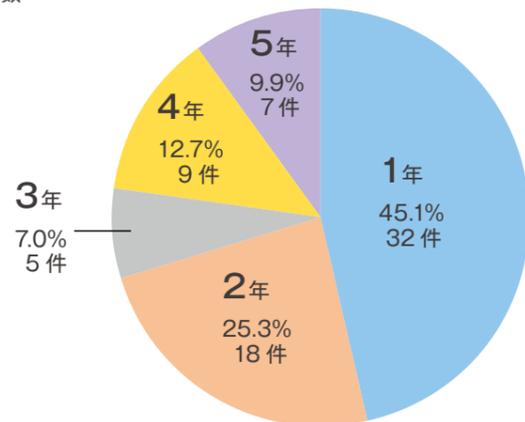


研究の全学的展開
(H26～27)

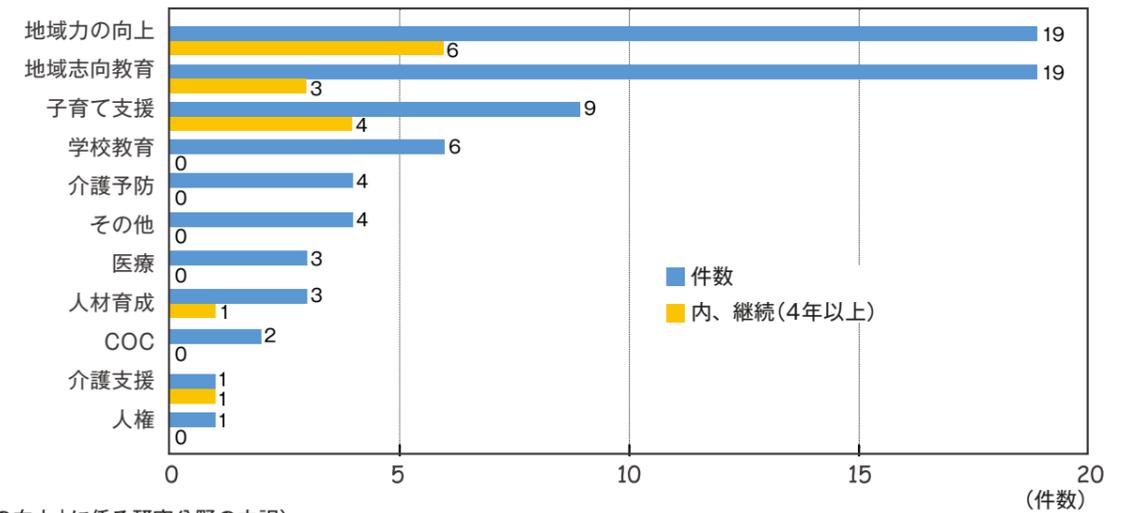


研究の深化
(H28～30)

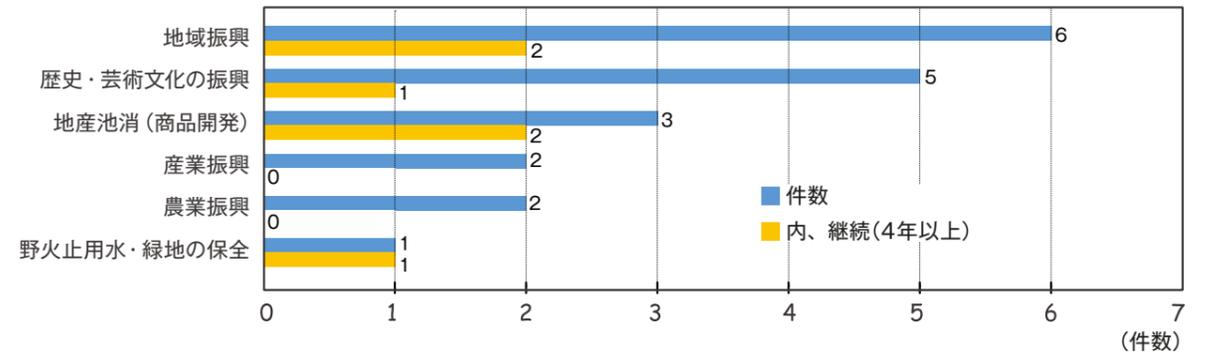
◆ 研究プロジェクトの継続年数



◆ 研究プロジェクトの研究分野(H26～30)



(「地域力の向上」に係る研究分野の内訳)



◆ 平成26～30年度に地域志向教育研究費で採択した研究プロジェクトの一覧

研究代表者の所属は、実施年度の所属(継続研究は最終年度の所属)とする

地域課題	No.	研究プロジェクト名	研究代表者	実施年度				
				26	27	28	29	30
子育て支援	1	乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業「+ (プラス) ママの子育てサロン」開催と有効性の検討	幼児教育学科 上垣内 伸子		●	●	●	●
	2	子育て講座「はらっぱ」の開催による地域へ向けての子育て支援事業	幼児教育学科 山田 陽子			●		
			幼児教育学科 川喜田 昌代				●	●
	3	子育て・子育て支援におけるリスク支援の在り方の検討～先駆的取り組みをしている団体との情報交流	幼児教育学科 向井 美穂		●	●		
	4	親の主体的な子育てを可能とする地域支援の在り方の検討	幼児教育学科 向井 美穂				●	
	5	地域における子育て支援の中核的な役割を担う現職保育者育成に繋がる発達相談モデルの構築	幼児教育学科 権 明愛			●	●	●
	6	学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み	人間発達心理学科 布施 晴美		●	●	●	●
	7	親子支援プロジェクト	人間福祉学科 山口 由美			●	●	●
	8	子ども元気プロジェクト	幼児教育学科 鈴木 康弘			●	●	●
9	「十文字発ママ支援ネット」構築のための基礎研究	人間発達心理学科 加藤 陽子		●				

地域課題	No.	研究プロジェクト名	研究代表者	実施年度					
				26	27	28	29	30	
介護予防	10	新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究	幼児教育学科 加藤 則子				●	●	
	11	新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導 (※平成28年度から地域連携共同研究所で採択)	健康栄養学科 池川 繁樹	●	●	※	※	※	
	12	運動を通じた地域交流の活性化	メディアコミュニケーション学科 飯田 路佳	●					
	13	新座市内介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み (※平成27年度から地域連携共同研究所で採択)	人間福祉学科 太田 眞智子	●	※	※			
介護支援	14	「NPO法人暮らしネット・えん えん食卓」食事サービスの改善への取り組み	食物栄養学科 岡本 節子	●	●	●	●	●	
医療	15	地域患者の治療における有用なレシピ開発と食生活調査	食物栄養学科 和田 安代		●				
	16	地域アミロイドーシス患者におけるカテキンの治療および予後に対する効果	食物栄養学科 松本 晃裕		●				
	17	生活習慣病などの疾病と食事・運動との関連についての検討	食物栄養学科 松本 晃裕				●	●	
地域力の向上	地産地消(商品開発)	18	地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用	食物栄養学科 小林 三智子	●	●	●	●	●
		19	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発	食物栄養学科 金高 有里		●	●	●	●
		20	サトイモの親芋活用プロジェクト	健康栄養学科 高橋 京子			●	●	
	地域振興	21	学生と共に考える大学キャラクターの活用とその展開 - 街に飛び出せ! プラスちゃん- (H26・27) - プラスちゃんがつなぐ地域の輪 - (H28) - 健康にプラス! 街づくりにプラス! - (H29) - みんなにプラス! これからもプラス! - (H30)	文芸文化学科 星野 祐子	●	●	●	●	●
		22	地域密着型メディアによる情報発信	メディアコミュニケーション学科 棚谷 祐一		●	●	●	●
		23	新座駅前における「ふるさと」創生の試み	生活情報学科 川瀬 基寛 文芸文化学科 星野 祐子	●		●		
		24	「新座さくらまつりウォークラリー」による新しい新座発見!	生活情報学科 川瀬 基寛	●				
		25	埼玉クイズ王予選会場を誘致し地域を大いに学ぶ	メディアコミュニケーション学科 石野 榮一		●			
		26	地域活性化事業・団体へのデザイン支援 ~「デザインリソース」機能および実践の「場」の提供~	メディアコミュニケーション学科 川瀬 基寛			●		
		緑地の保全・野火止水用水	27	野火止水用水保全推進プロジェクト ふるさとの緑を育むプロジェクト ふるさとの緑と野火止水用水を育むプロジェクト	児童教育学科 星野 敦子	●	●		
産業振興	28		地域連携による地域産業情報の発信プロジェクト	メディアコミュニケーション学科 加藤 亮介		●			
	29		シャッター街で考える心理学的地域振興	人間発達心理学科 東畑 開人			●		
農業振興	30	観光型農業経営における女性支援	生活情報学科 大友 由紀子	●					
	31	新座市とその周辺地域における農産物の栄養学的側面からの課題解決	健康栄養学科 徳野 裕子	●	●				

地域課題	No.	研究プロジェクト名	研究代表者	実施年度					
				26	27	28	29	30	
地域力の向上	歴史・芸術文化の振興	32	ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業	児童教育学科 久保田 葉子		●	●	●	●
		33	新座市「フシギマップ」プロジェクト	人間発達心理学科 東畑 開人		●			
		34	新座歴史探訪 (H26) 新座歴史探訪 II (H27)	21世紀教育創生部 池間 里代子	●	●			
		35	新座市における地域文化アーカイブズの創造	文芸文化学科 小林 実	●	●			
		36	秩父市山村集落の伝統文化の継承と新座市との交流	人間福祉学科 野島 靖子	●				
		人材育成	37	新座市女性職員と女子学生のWin-Winキャリア支援	十文字こと研究所 亀田 温子 人間福祉学科 宮城 道子		●		●
38	中山間地域の豊かな自然と都市部における人的物的資源との融合による新たな人材育成プランの創造		児童教育学科 狩野 浩二	●	●	●	●		
39	ワークショップを用いた地域の課題解決と人材育成の手法に関する研究		メディアコミュニケーション学科 松永 修一	●					
学校教育	40		小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合	児童教育学科 山本 悟		●	●	●	
	41		ブレブラ@十文字の森	児童教育学科 星野 敦子 地域連携推進機構 名塚 清		●			
人権	42	先進的「学校づくり運動」の成果を応用した創造的人材育成プラン(教師教育)の推進	児童教育学科 狩野 浩二	●					
	43	十文字スポーツクラブを活用した人材育成と地域の子供たちの基礎的運動能力の向上	21世紀教育創生部 石山 隆之	●					
	44	地域課題解決のための基礎研究	21世紀教育創生部 宮川 保之	●					
	45	新座市の児童生徒の喫煙開始予防に向けた指導者養成	健康管理センター 齋藤 麗子	●	●				
	46	人権啓発・デートDV予防ワークショップ実施	生活情報学科 亀田 温子	●					
地域志向教育	47	人材育成方針「Jモデル」開発のための基礎的研究	幼児教育学科 大宮 明子	●	●				
	48	地域志向教育実施のためのプログラム開発	メディアコミュニケーション学科 安達 一寿		●	●	●	●	
	49	地域志向教育での教育課程・教育内容・教育方法開発の研究	メディアコミュニケーション学科 安達 一寿	●	●				
			幼児教育学科 大宮 明子			●			
			メディアコミュニケーション学科 大西 正行	●					
	50	地域を歩き、地域を紹介する冊子作成 実践編 各種団体の広報誌とのコラボレーション 各種団体の広報誌と連携し、「いいね! にいざ2017年度版」を作成 地域志向科目に関する教材開発	メディアコミュニケーション学科 石野 榮一		●				
						●			
						●	●		
51	地域志向科目での学生の能力育成に関する分析と評価	地域連携推進機構 名塚 清					●		
52	自主社会活動の開発(ワークショップを用いた地域の課題解決と人材育成の手法に関する研究)	文芸文化学科 松永 修一			●				

地域課題	No.	研究プロジェクト名	研究代表者	実施年度				
				26	27	28	29	30
地域志向教育	53	新座市内の介護保険施設利用者への傾聴ボランティア体験学習	人間福祉学科 大山 博幸	●	●	●	●	
	54	新座市内の公立保育園および児童センターと協働した実習体験を基盤に置く保育者養成初期段階のカリキュラム検討	幼児教育学科 鈴木 晴子	●	●			
	55	身体表現による、教員を目指す学生のための資質向上の取り組み	児童教育学科 日出間 均					●
	56	佐藤ゼミ地域福祉活動(知的障害者余暇活動支援ボランティア)体験学習	人間福祉学科 佐藤 陽	●	●			
	57	聴覚障害児への運動支援と学生の育ち	幼児教育学科 鈴木 康弘	●				
	58	次世代地域人材育成プロジェクト	カレッジスポーツセンター 石山 隆之			●		
		学生の自主活動による地域スポーツの活性化に関する実践プロジェクト～社会貢献体験型オープンゼミナール2【のりさん塾継続版】～					●	
	59	メディアワークプロジェクト～地域教育・情報支援のために～	メディアコミュニケーション学科 棚谷 祐一	●				
	60	地域と連携した取り組みの教育的効果についての検証(H26) 地域と連携した実践の教育的効果を高めるための方策の検証(H27)	人間発達心理学科 綿井 雅康	●	●			
	61	「産官地学」協働に依るPro-act型人材の育成機能強化策に係る実学的研究	児童教育学科 宮川 保之			●		
	62	地域とともに学生を育成し、地域の学校を支える学校インターンシップの確立	児童教育学科 山本 悟	●				
	63	恋する大学改革～地域貢献+（プラス）教育改革～（H26） 恋する大学改革part II～地域貢献+（プラス）教育改革～（H27）	文芸文化学科 石川 敬史	●	●			
	64	「健康と運動」から新座市民ロードレースへ	人間発達心理学科 平田 智秋		●			
	65	更なる飛躍を図るさつまいもプロジェクト	リメディアル教育センター 高橋 京子	●				
	COC	66	地域貢献のあり方に関する総合的研究	学長 横須賀 薫	●			
67		街と一体化した地域貢献のあり方に関する基礎研究	生活情報学科 加藤 順弘	●				
その他	68	新座市「を/で」心理学する一地域に展開するコミュニティ心理学研究の基礎づくり	人間発達心理学科 東畑 開人	●				
			人間発達心理学科 風間 文明		●			
	69	新座市の高校・大学における外国出身者の実態調査 ー日本語と日本文化に関するコミュニケーションを中心に	留学生別科 仇 暁芸	●				
	70	指定管理者制度を柱とした新座市への政策提言研究	21世紀教育創生部 石野 榮一	●				
71	図書館地域連携に関する基礎的リサーチ・アクション	表現文化学科 東 聖子	●					

2 平成30年度 採択研究プロジェクトの実績報告

(平成30年度 採択研究プロジェクト一覧)

地域課題	No.	研究プロジェクト名	研究代表者	実施年度				
				26	27	28	29	30
地域志向教育推進費	1	地域志向教育実施のためのプログラム開発	メディアコミュニケーション学科 教授 安達 一寿		●	●	●	●
	2	地域密着型メディアによる情報発信	メディアコミュニケーション学科 准教授 棚谷 祐一		●	●	●	●
	3	地域志向科目に関する教材開発	メディアコミュニケーション学科 教授 石野 榮一	●	●	●	●	●
	4	地域における子育て支援の中核的な役割を担う現職保育者育成に繋がる発達相談モデルの構築	幼児教育学科 講師 権 明愛			●	●	●
	5	親子支援プロジェクト	人間福祉学科 准教授 山口 由美		●	●	●	●
	6	子ども元気プロジェクト2018	幼児教育学科 准教授 鈴木 康弘		●	●	●	●
	7	身体活動による新たな地域交流の形成と、教員を目指す学生の資質向上の取り組み	児童教育学科 教授 日出間 均					●
	8	「NPO法人 暮らしネット・えん えん食卓」食事サービス向上への取り組み	食物栄養学科 准教授 岡本 節子	●	●	●	●	●
	9	地域志向科目での学生の能力育成に関する分析と評価	地域連携推進機構 副機構長 名塚 清					●
地域実践研究部門	10	生活習慣病などの疾病と食事・運動との関連についての検討	食物栄養学科 教授 松本 晃裕				●	●
	11	ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業	児童教育学科 講師 久保田 葉子		●	●	●	●
	12	学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み	人間発達心理学科 教授 布施 晴美	●	●	●	●	●
	13	乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業「+（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討	幼児教育学科 教授 上垣内 伸子		●	●	●	●
14	新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究	幼児教育学科 教授 加藤 則子				●	●	
地域連携創造・支援部門	15	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発	食物栄養学科 講師 金高 有里		●	●	●	●
	16	地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用	食物栄養学科 教授 小林 三智子	●	●	●	●	●
	17	子育て講座「はらっば」の開催による地域へ向けての子育て支援事業	幼児教育学科 准教授 川喜田 昌代			●	●	●
	18	学生と共に考える大学キャラクターの活用とその展開 ーみんなにプラス!これからもプラス!ー	文芸文化学科 准教授 星野 祐子	●	●	●	●	●
	19	ふるさとと緑と野火止用水を育むプロジェクト	児童教育学科 教授 星野 敦子	●	●	●	●	●

地域志向教育推進費 No.1										
研究課題名	地域志向教育実施のためのプログラム開発									
研究代表者	安達 一寿(メディアコミュニケーション学科 教授)									
共同研究者	地域教育開発部門 宮野 周(幼児教育学科 准教授)、綾井 桜子(児童教育学科 准教授) 永作 稔(人間発達心理学科 准教授)、宮城 道子(人間福祉学科 教授) 徳野 裕子(健康栄養学科 准教授)、和田 安代(食物栄養学科 講師) 竹嶋 伸之輔(食物栄養学科 教授)、星野 祐子(文芸文化学科 准教授) 込江 雅彦(生活情報学科 准教授)、加藤亮介(メディアコミュニケーション学科 講師) 本間 修(総務部)、保岡 義明(教務部)、藤井 宏昌(就職支援部) 戸塚 勝美(教育情報推進課)、名塚 清(地域連携推進機構)									
<p>1. 概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 共通科目の地域志向科目「地域で学ぶ」「埼玉の地理・歴史・文化」の内容や方法の充実のため、ゲスト講師の招聘を行う。 ● 地域教育開発部門では、地域志向教育実施に向けての教育課程開発、教育内容・教育方法に関する取組を行っている。本取組では、共通教育での地域志向科目の枠組検討、教材開発等、学科専門科目での地域志向科目の枠組検討、教材開発等、学生育成モデルと教育指標、評価ツールの開発と実施、学生成果測定に関する調査研究と実施を行った。 										
<p>2. 活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ゲスト講師の招聘 「埼玉の地理・歴史・文化」(共通科目/選択/前後期各1コマ)、及び「地域で学ぶ」(共通科目/選択/後期1コマ)でゲスト講師を招聘し、学生の地域の理解や社会貢献活動への参画を推進する。 ● 学びのナビゲーターの開発 学びのPDCAの実現のため、「入門セミナー」(共通科目/1年次必修)で利用する教材として、「学びのガイドブック」を開発する。 ※ 研究への参加人数：教職員15人 										
<p>3. 成果</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>科目名</th> <th>招聘ゲスト講師数</th> <th>履修者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>埼玉の地理・歴史・文化</td> <td>25名(前期・後期合わせて)</td> <td>前期：47名、後期：42名</td> </tr> <tr> <td>地域で学ぶ</td> <td>11名</td> <td>109名</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業アンケート「地域で学ぶ」の状況 授業レベルの適切性 3.84(全学平均3.29)、満足度 3.26(全学平均3.25) ● 特徴的な感想 様々な講師の話を知ることができる 地域の活動に参加できる 様々な職業の知識を学ぶことができる 地域との関わりができる ボランティアを通して地域の方と交流できる 地域を知り、学ぶことができる など 		科目名	招聘ゲスト講師数	履修者数	埼玉の地理・歴史・文化	25名(前期・後期合わせて)	前期：47名、後期：42名	地域で学ぶ	11名	109名
科目名	招聘ゲスト講師数	履修者数								
埼玉の地理・歴史・文化	25名(前期・後期合わせて)	前期：47名、後期：42名								
地域で学ぶ	11名	109名								

地域志向教育推進費 No.2	
研究課題名	地域密着型メディアによる情報発信
研究代表者	棚谷祐一(メディアコミュニケーション学科 准教授)
共同研究者	好本 恵(文芸文化学科 教授) 石野 榮一(メディアコミュニケーション学科 教授) 加藤 亮介(メディアコミュニケーション学科 講師) 美和 さなえ(株式会社クローバーメディア パーソナリティ)
<p>1. 概要</p> <p>「大学が発信する地域情報支援」をコンセプトに行うプロジェクト。本学十文字ラジオ研究部の活動をベースに番組制作を行い、志木市に拠点を置くコミュニティ FM局「クローバーラジオ」のレギュラー番組として継続的に放送を行った。</p> <p>内容的には学生の個人的な関心事や生活情報等が中心ではあるが、番組内で地域や大学のイベントを紹介するなど、地域密着型メディアであることを意識し、地域に視点をのこした番組づくりを心がけた。また、今年度は、従来の学内サークル「ライターデザイン部」との活動連携に加え、地域情報等、番組の質的向上に向けて努力をした。番組の運営にあたってはとくにSNSによる情報発信に力を入れ、番組知名度の向上とインタラクティブな番組づくりを目指した。</p>	
<p>2. 取り組み</p> <p>①レギュラー番組「十文字プレゼンツ Campus☆Radio」番組制作と放送 クローバーラジオにおいて番組「十文字プレゼンツ Campus☆Radio」(毎週日曜日22:30～23:00)を放送。2015年7月5日(日)の第1回放送以来、現在までの年始の特別編成時を除きレギュラー番組として年間およそ52本のペースで毎週コンスタントに放送を行う。また、2015年10月9日より、放送局の好意によって無償の再放送枠が提供された(毎週金曜日深夜 1:30～2:00)。以来、本放送と再放送を併せて毎週2回の放送を継続的にしている。</p> <p>番組制作は毎週水曜日と金曜日の放課後(学期中)が充てられ、研究代表者の指導のもと、企画、取材、台本づくり、ナレーション、収録等のプロセスを学生が分担して行っている。番組は生放送ではなくPCベースのハードディスクレコーディングによる収録形式であり、最終的な編集、納品は監修も兼ねて研究代表者の棚谷が担当している。いわゆるコミュニティ FMであるため、受信可能地域は朝霞市、新座市、志木市、和光市および練馬区の一部に限定されるが、スマートフォンの無料アプリ「リスラジ」等を利用することによってエリアフリーな聴取が可能となっている。</p> <p>②活動連携 本年度から、メディアコミュニケーション学科の自主ゼミ「M CLIP」内にラジオ部門である「Radio CLIP」を立ち上げ、従来のラジオ研究部との共同運営体制とした。月およそ4回の放送のうち、3回をラジオ研究部、1回をRadio CLIPの制作というローテーションで番組制作を行った。また、研究代表者の担当授業「音声制作」との連携を強化し、授業内で制作したラジオ番組のうち、優秀作品を「十文字プレゼンツ Campus☆Radio」内で紹介した。</p> <p>※ 研究への参加人数：学生13人、教職員4人、企業1人</p>	
<p>3. 成果</p> <p>学生が主体となって企画、取材、運営、収録を行うことでメディアリテラシーの向上を図るというのが当初の目的であったが、番組を企画、制作する過程で個人的な関心事のみではなく地域の自然や文化、産業等についても学び、結果として地域への関心や愛着を深めていくことができた。また、地域や大学のイベントを紹介するなど、微力ではあるが地域の情報支援ツールとして役割の一端を担うことができたのではないかと感じている。年間約52本の番組を制作・放送することで協同力・リーダーシップの向上がみられ、またパーソナリティを担当することで社会的責任を自覚、適切な話題選び、話し方を意識するなど社会人基礎力の向上がみられた。また、ラジオ研究部とRadio CLIPはそれぞれ独立して番組を制作するのみでなく、自主的にコラボレーションを図るなど、より有機的連携を高めていることは良い傾向であるといえる。</p> <p>今後も地域密着型メディアの一翼として、地域活性化に貢献し、地域と大学を繋ぐメディアとして認められるよう、活動を充実させていきたい。</p>	

地域志向教育推進費 No.3	
研究課題名	地域志向科目に関する教材開発
研究代表者	石野 榮一 (メディアコミュニケーション学科 教授)
共同研究者	安達 一寿 (メディアコミュニケーション学科 教授) 星野 敦子 (児童教育学科 教授)、星野 祐子 (文芸文化学科 准教授) 名塚 清 (地域連携推進機構)
<p>1. 概要</p> <p>COC採択以降、毎年度、本学の地域連携活動の参考文献・資料として、オリジナルテキスト「いいね!にいざ」の制作に取り組んできた。地域志向の研究・教育を進める上で、最初の1歩として新座市に関する知識を得てほしいという狙いであった。2018年度は、COC最終年度を迎え本学の地域貢献活動をさらに充実、発展させるため、これまでの活動をまとめ、活動の手引きともなる「地域活動ガイドブック」を制作することにした。学生を制作にかかわらせるため、本学と関係が深い「朝霞地区4市」の市長インタビューにも取り組んだ。</p>	
<p>2. 取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本学の地域連携活動を進めていくためのオリジナルテキスト「いいね!にいざ」の発展形態として、本学の地域連携活動全般をまとめた。学生や教職員がスムーズかつ積極的に地域貢献活動に取り組むことができるよう、活動事例などを豊富に掲載した。また、継続的な地域貢献活動を進めるため、本学と関係が深い「朝霞地区4市(朝霞、志木、和光、新座)」からメッセージをもらうため、4市の市長にインタビューを実施。さらに、本学の地域連携活動の将来像を地域連携推進機構の機構長代理に聞く記事を掲載した。 ● テキスト制作に学生をかかわらせるため、平成30年度後期「広報制作」の授業を活用。具体的には、4市の市長インタビューに向けて、各市の特徴や本学とのかかわりを調べ、学生が直接、各市長に話を聞き、記事化した。また、本学の地域連携活動の歴史を調べ、機構長代理に地域連携活動の意義、魅力、これからを聞き、記事化した。 <p>※ 研究への参加人数：学生約20人、教職員6人、行政機関等約10人</p>	
<p>3. 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「十文字学園女子大学 地域活動ガイドブック」は、A4版、16ページ建て、フルカラーで作成し、印刷部数は1500部である。19年度新入生全員と教職員に配布。また、市長インタビューに協力をいただいた、朝霞市、志木市、和光市、新座市に資料提供した。 ● 学生は、計5グループに分かれ、事前調査や資料収集、質問制作などに取り組み、インタビューに臨んだ。各市ではいずれも学生への丁寧な説明をいただいたほか、各市長からも温かな激励のメッセージ、期待が寄せられ、地域の現状や課題を学ぶとともに、地域社会を学ぶ機会になった。 ● 地域連携推進機構の名塚先生等、多方面からの協力を得て、地域志向科目、ボランティア、自主社会活動、地域貢献活動の具体例をまとめることができた。 	
 <p>「地域活動ガイドブック」表紙</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>地域活動のすすめ、社会人基礎力</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>4市市長インタビュー</p> </div> </div>	

地域志向教育推進費 No.4	
研究課題名	地域における子育て支援の中核的な役割を担う現職保育者育成に繋がる発達相談モデルの構築
研究代表者	権 明愛 (幼児教育学科 講師)
共同研究者	齋藤 忍 (特別支援教育センター 准教授) 山田 陽子 (幼児教育学科 教授)
<p>1. 概要</p> <p>日々子どもとかわる現職保育者が障害児を含む気になる子どもを支援する地域の中核的な役割を担う存在として期待できるところに視点を当てた事業である。地域の保育所と幼稚園をそれぞれ1園ずつモデル園として設定し、発達相談支援活動を通して現場保育者の養成及び保護者支援を行った。併せて、現場保育者に大学に来て頂き在学生在に講演を行い、相互の資源を活用しながら、現場保育者と在学中の保育者を目指す学生の障害のある子どもの支援に関する学びを深める取り組みを行った。</p>	
<p>2. 取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ● モデル幼稚園では6名の発達相談を延べ72件実施、モデル保育園では今年度発達相談は実施しなかった。 ● モデル幼稚園の園児2名を対象にTEACCHプログラムの構造化を取り入れた療育を6回、保護者を対象にペアレント・トレーニングを6回実施した。園児や保護者への支援方法を担任保育士と共有し、モデル幼稚園における支援に生かせるようにした。 ● モデル幼稚園と保育園そして地域の療育施設の職員と大学の研究者が合同で外部講師を招いて、「気になる子への支援～保育の現場から～」をテーマに実践検討会を実施した。 ● 現場とのつながりの中での在学生在の学びが深まった。 <ul style="list-style-type: none"> ① 保育者を目指す学生を対象に「おもちゃで遊ぶことの面白さと楽しさ」をテーマにした現場保育者の講義を受けながら、おもちゃに触れ合うことで実践の視点から学びが深まった。 ② 障害児支援を目指す学生が、モデル幼稚園における発達相談対象児を対象に療育を計6回、保護者を対象にペアレント・トレーニングを計6回実施し、在学生在、現場保育者、保護者が具体的な支援方法について学んだ。 <p>※ 研究への参加人数：学生28人、教職員4人、行政機関等1人、地域団体等6人、保護者5人</p>	
<p>3. 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ● モデル園における1年間の発達相談活動を通して、現職保育者の障害児保育につながる力量形成につながった。 ● 「気になる子どもへの支援」をテーマに実践検討会を実施することで障害児保育に関する実践の在り方について学ぶことができた。 ● 現場保育者と在学生の往還型の学びを通して、障害児支援の担い手である現場の保育者と障害児支援を目指す在学生の学びが深まったことが、本事業のもう一つの成果として挙げられる。 ● 現場保育者と共に実践検討会を行うことで、大学の資源を地域に還元することができた。 	
 <p>地域の保育所の理事長による出前授業</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>実践検討会</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>実践検討会</p> </div> </div>	

地域志向教育推進費 No.5	
研究課題名	親子支援プロジェクト
研究代表者	山口 由美 (人間福祉学科 准教授)
共同研究者	伊藤 陽一 (人間福祉学科 准教授) 小笠原 順子、塩沢 夕起子 (志木市いろは子育て支援センター) 山下 美香、小西 憲子 (志木市西原子育て支援センター) 北澤 恭子、橘 郁子、金子 里佳、大東 真由美、松尾 真由美 (NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪)
1. 概要	親子支援プロジェクトでは、初年度から父親と子どもたちがシンプルなブロック遊びから、遊びを一緒に楽しむことを知り、遊ぶ機会を増やし、父子による遊びの継続につながればという思いからワークショップを開催している。平成30年度は、平成29年度からの事業を継続の可否について、親子支援プロジェクト会議を開催し検討した。平成30年は、親子への遊び支援を中心に継続することとなった。次年度以降も親子への遊び支援活動を継続するために、スキルアップのためのカブラワークショップを開催した。また、KAPLAを用い、学生たちが親子支援に関する学びを深める取り組みを行った。
2. 取り組み	<p>KAPLAブロックは、木製ブロックで手のひらに乗るほどの小さな板で、大きさはたった1種類のシンプルなブロックだからである。KAPLAブロックは小さな子どもから、大人までが楽しむことができ、親子で力を合わせて作品を作ること可能なブロックである。父親と子どもたちがシンプルなブロック遊びから、遊びを一緒に楽しむことを知り、遊ぶ機会を増やし、父子による遊びの継続につながればという思いからワークショップを開催した。</p> <p>〈児童関係の専門職及び専門職を目指す学生を対象としたKAPLAワークショップの開催〉 平成30年9月2日(日)に、親子支援プロジェクトで、KAPLAブロックの指導者養成ワークショップを実施した。カブラジャパンインストラクターからKAPLAの遊び方や発展のさせ方等を学び、学生が行う子育て支援センターでの「遊び支援」の活動に役立つこととした。参加者は学生4名、専門職12名、教員1名であった。</p> <p>〈志木市の子育て支援センターでKAPLAブロックを用いた遊び支援〉 第1回目 平成30年11月17日に、志木市A子育て支援センターで、KAPLAブロックを用いた遊び支援を行った。 参加者：乳幼児5名、保護者4名、学生2名 第2回目 平成31年1月12日に、志木市B子育て支援センターで、KAPLAブロックを用いた遊び支援を行った。 参加者：乳幼児23名、保護者21名、学生1名</p> <p>※ 研究への参加人数：学生4人、教職員2人、地域団体等10人</p>
3. 成果	<p>ワークショップに数回参加した方からは、「ワークショップは毎回学びの発見があり、KAPLAの魅力が再認識している。今回の講座では子どもたちへの伝え方や積み方のコツなど参考になった」という意見や、専門職であり、母親である参加者からは、「私の子どもが好きで、イベントがあれば参加しているが、遊びが発展できるような関わり、声掛けが難しいと感じていたところだった。なかなか子ども中心(小さい子が多い)の会場では今回のような作品をつくるのが難しいので、貴重な体験だった。段階的に進めたり、大きなものを作って達成感を味わったり『楽しい』『うれしい』を実感して楽しませてもらった」という意見をいただいた。平成27年度からCOC事業で、地域の親子と関わらせていただき、顔見知りの関係になってきたと感じる。遊び支援等に参加した学生たちは、今まで関わるのがなかった未就園児やその父母たちの関わりを通して、実習では学ぶことがほとんどない未就園児との関わりや、親子支援を実践的に学ぶことができた。</p>
	 <p>KAPLAブロックを用いた遊び支援の様子</p>

地域志向教育推進費 No.6	
研究課題名	子ども元気プロジェクト2018
研究代表者	鈴木 康弘 (幼児教育学科 准教授)
共同研究者	宮野 周 (幼児教育学科 准教授)、藪崎 伸一郎 (幼児教育学科 講師) 川瀬 基寛 (メディアコミュニケーション学科 准教授) 大山 博幸 (人間福祉学科 准教授)、名塚 清 (地域連携推進機構)
1. 概要	<p>少子高齢化や社会保障費の急速な増加に象徴されるように、今後の我が国の財政的基盤は脆弱であり、教育(子育て支援)への資源投入はますます難しくなることは自明である。我々は今までのシステム(行政主導、行政依存)から脱却し、パラダイムシフトを模索しなければならない時期に来ているといっても過言ではないであろう。</p> <p>このような状況を鑑み、本研究では、パラダイムシフトのひとつの方向性として、子育てをキーワードとした豊かな社会システムのあり方を検討してきた(2015年度、2016年度、2017年度プロジェクト)。本年度の目的は、これまでのプロジェクトで積み重ねてきた成果(多様な子育て支援)を総括し、子育てを核とした地域活性のための条件とその関係性を明らかにし、COC事業終了後も持続可能なシステムのあり方を検証することである。</p>
2. 取り組み	<p>主な活動内容は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ワークショップ×ワークショップ edu 2018(2018年11月10日) スポンジ・ローラーで様々な素材に描く感触を体験できるワークショップを実施した。教育・保育実習以外の場で保護者と子どもへの理解を深めることや環境づくりの難しさ、異学年や他大学の学生のワークショップとの交流によって学生のアート・ワークショップに対する視野を広げることができた。また保護者も活動を通して日常とは異なる子どもの姿を知る機会となった。 ● 伝承遊びプロジェクト(2019年1月12日) 「コマ」、「竹馬」、「ゴム跳び」、「お手玉」、「おはじき」、「けん玉」、「凧あげ」を遊びの達人(地域高齢者)に教わるという形態で行った。学生(幼児教育専攻の大学生)は地域高齢者と子どもの共創関係が豊かになるための役割を担う(機能を果たす)ことを主な目的として参加した。また、伝承遊び経験の少ない学生は、地域高齢者より昔遊びの多様な遊び方や工夫の仕方を学び、保育者としての資質を高めることも参加目的の一つとした。 ● 親子でベースボール体験プロジェクト(2019年1月19日) 「投げる」や「打つ」といった動きを高度に洗練させ、身に付けているプロ野球経験者、幼児教育について専門的な知識を学んでいる学生及び研究者といった3者の共創により、ベースボール型の遊び(打ったり投げたりすること)への子どもや保護者の興味関心を高めること目指して計画した。プロジェクトを検討する過程において、保護者へのアプローチをどのように行うべきかが今後の重要課題の一つとして認識されたため、参加した保護者に質問紙調査を実施し、その結果を分析した。 <p>※ 研究への参加人数：学生46人、教職員6人、行政機関等3人、地域団体等6人、企業4人、プロジェクトに参加した子どもや保護者 約300人</p>
3. 成果	<p>プロジェクト準備期間に共創関係構築の在り方について、プロジェクト実施者である学生との協議を十分に深められなかったため共創関係の在り方について十分な検証を行うことはできなかった。しかしながら、例えば、「地域高齢者のアドバイスを参考にし大学生が子どもと共にお手玉遊びを楽しむ姿」や「ゴム跳び遊びの場面で、子どもから出てきたゴムの跳び方(アイデア)に大学生と地域高齢者がそれぞれの立場からアドバイスを行う姿」など、豊かな共創関係の芽になりそうな場面をいくつか確認することができたことは本プロジェクトの大きな収穫であった。また、地域高齢者の生き生きとした表情や積極的な姿を確認することができたことも、今後の豊かな共創関係を考える上での重要なヒントとなった。</p> <p>地域へのフィードバックとして、シンポジウム「COC事業の成果と今後の課題」(2019年3月2日(土)13時～16時30分・参加費無料)で研究成果を公表し、地域住民との意見交流を行った。参加者(75名)アンケートでは、「大学が幅広い活動・連携の核となり、地域活性化につながっていることが分かった」「地域としっかり連携できていて素晴らしい」といった感想が記述されていた。また、「地域志向教育研究プロジェクト 研究成果論文集2014～2018」に投稿し、公表している。</p>

地域志向教育推進費 No.7									
研究課題名	身体活動による新たな地域交流の形成と、教員を目指す学生の資質向上の取り組み								
研究代表者	日出間 均 (児童教育学科 教授)								
共同研究者	狩野 浩二 (児童教育学科 教授)、久保田 葉子 (児童教育学科 講師) 堀 のぞみ (身体表現ファシリテーター)、新座クリエイティブ・ワークショップ								
<p>1. 概要</p> <p>新座市で障害のある人となない人が共に身体表現を創造する活動が続いている「新座クリエイティブ・ワークショップ」のメンバーと連携し、本学の教員を目指す学生や特別支援教育に関心のある学生が非言語コミュニケーションのあり方を体験的に学んだ。年間を通して全4回ワークショップで経験を積み、最終回を新座市立中央公民館にて地域の方に公開した。チラシは児童教育学科の学生が作成した。</p>									
<p>2. 活動内容</p> <p>新座クリエイティブ・ワークショップ」のメンバーと共に、身体表現を創造する活動に参加する。振り付けられたダンスを完成させることを目指すのではなく、参加者一人一人の即興的な表現や、他の人の動きに呼応して生まれた偶然的な動きもダンスに変えていく経験をしながら、人の動きの良さや個性を捉えて、瞬時に応えることを学んでいく。参加学生は児童教育学科1年生6名、児童教育学科2年生5名、食物栄養学科1年生2名。</p> <div data-bbox="943 751 1299 1249" data-label="Image"> </div> <p>【活動時期】</p> <table border="1"> <tr> <td>7月1日</td> <td>顔合わせとワークショップ① 年間計画について意見交換</td> </tr> <tr> <td>11月4日</td> <td>ワークショップ② 振り返りと発表に向けた意見交換</td> </tr> <tr> <td>12月23日</td> <td>ワークショップ③ 振り返りと発表に向けた意見交換 公開ワークショップのチラシ作成</td> </tr> <tr> <td>1月20日</td> <td>身体表現の公開ワークショップと振り返り</td> </tr> </table> <p>その他、学内でコミュニティアートに関連する文献を読む。写真展示パネルを作成。</p> <p>※ 研究への参加人数：学生13人、教職員3人、地域団体等22人</p>		7月1日	顔合わせとワークショップ① 年間計画について意見交換	11月4日	ワークショップ② 振り返りと発表に向けた意見交換	12月23日	ワークショップ③ 振り返りと発表に向けた意見交換 公開ワークショップのチラシ作成	1月20日	身体表現の公開ワークショップと振り返り
7月1日	顔合わせとワークショップ① 年間計画について意見交換								
11月4日	ワークショップ② 振り返りと発表に向けた意見交換								
12月23日	ワークショップ③ 振り返りと発表に向けた意見交換 公開ワークショップのチラシ作成								
1月20日	身体表現の公開ワークショップと振り返り								
<p>3. 成果</p> <p>身体表現ワークショップの第4回目(最終回)となる公開ワークショップに本学学生10名、教員1名、「新座クリエイティブ・ワークショップ」のメンバー22名の合計33名が出演し、即興ダンスを通してコミュニケーションの深め、豊かな表現を紡ぎ出した。観客のアンケートでは「十文字の学生は心を開き、身体や動きがそれにとめない、自分を開放できていた」「音やりボンや布などを使い、モダンダンスのようなとてもレベルの高い、どこに出しても優れているパフォーマンスであったと思う。何より、全員が自分をすなおに出していることがよかった」との感想が寄せられた。振り返りの会では学生全員がスピーチをして、身体表現を通して多様な個性を持つ人と関わることで得た経験をポジティブに捉えて発表していた。</p> <div data-bbox="163 1633 528 1915" data-label="Image"> </div> <p>身体表現 1</p> <div data-bbox="543 1633 914 1915" data-label="Image"> </div> <p>身体表現 2</p> <div data-bbox="928 1633 1299 1915" data-label="Image"> </div> <p>身体表現 3</p>									

地域志向教育推進費 No.8	
研究課題名	「NPO法人暮らしネットえん・えん食卓」食事サービス向上への取り組み
研究代表者	岡本 節子 (食物栄養学科 准教授)
共同研究者	名倉 秀子 (食物栄養学科 教授)、金高 有里 (食物栄養学科 講師) 小島 美里 (NPO法人暮らしネット・えん えん代表)
<p>1. 概要</p> <p>【背景】「NPO法人暮らしネット・えん」は高齢になっても障がいがあっても共に生きる地域社会を創ることを目的としたNPO法人であり、グループリビング及びグループホーム利用者を対象に、「えん食卓」にて夕食が提供され、夕食献立の作成、訪問調査を行っている。</p> <p>【課題】利用者は65～95歳の高齢者であり、年々利用者の高齢化が進み、健康の維持増進、疾病予防、摂食嚥下機能に配慮した食事と食事へのニーズが変化してきた。</p> <p>【目的】利用者のニーズに合わせて心臓疾患、高血圧症の予防のための塩分制限食、摂食嚥下しやすい食事の献立を作成し、利用者が嗜好的にも満足できる夕食の提供を目的とした。</p>	
<p>2. 活動内容</p> <p>①施設への訪問調査 施設に学生と訪問し、食事摂取状況、摂食・嚥下機能、食欲等を確認しながら、利用者との交流を図る。食生活の支援が夕食のためのため、聞き取り可能な利用者には朝食、昼食の食事摂取状況と嗜好調査を行い、聞き取り不可の利用者にはケアスタッフから情報を収集した。</p> <p>②料理の試作・献立作成 学生が献立を立て教員がチェックをした後に、学内で料理の試作を行い、食品、調味料の重量、献立全体のバランスなどを確認し、えん食卓の調理スタッフに1ヶ月分の夕食の献立をメールで送付した。</p> <p>③施設訪問 2～3ヶ月に1回「暮らしネット・えん」内の「グループホームえん」、「グループリビングえんの森」を訪問し、利用者の喫食状況を確認しながら、夕食を共にして、料理の感想や食事への要望を確認した。</p> <p>④厨房内実習 えん食卓の厨房内で学生は、自分の立てた献立を人間福祉学科の学生と共に調理を行い、献立の適合、食事の量と質、料理の出来栄を確認し、教員と共に衛生管理の指導を行った。</p> <p>※ 研究への参加人数：学生12人、教職員4人、地域団体等5人</p>	
<p>3. 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 昨年度に引き続き塩分制限食の献立に取り組み、さらに、グループホーム利用者向けの摂食嚥下しやすい食事の提供を試みた。グループホーム利用者と自立した生活を営むグループリビングの利用者では、食事へのニーズが異なり、グループリビングの利用者は塩分制限食では満足度が低く、また、摂食嚥下しやすい食事の献立についても学生は苦慮していたが、献立作成能力を身に付ける良い機会となった。 ● 学生が施設に訪問し、利用者から直接献立の評価を受けることで、献立作成の難しさを実感するとともに、人間福祉学科の学生と共に利用者とのコミュニケーションを図ることで、高齢者施設の環境を間近に知る機会となり、社会貢献の重要性も感じる事ができた。 ● 地域での実践的な活動は、利用者には食事を通して健康を保つことができ、学生にとっては学内で学習した内容を展開していく貴重な場となり、学習意欲の向上につながるが見込まれる。 <div data-bbox="1944 1642 2190 1978" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="2279 1642 2525 1978" data-label="Image"> </div>	

地域志向教育推進費 No.9																			
研究課題名	地域志向科目での学生の能力育成に関する分析と評価																		
研究代表者	名塚 清 (地域連携推進機構 副機構長)																		
共同研究者	安達 一寿 (メディアコミュニケーション学科 教授)																		
<p>1. 概要</p> <p>本研究では、2015年度から2018年度で実施したジェネリックスキルの測定結果を分析し、本学の学生の特徴や伸長状況を明らかにし、さらにその要因に関して傾向を洗い出し、対応策を検討することを目的とする。ジェネリックスキルの測定には、PROG(株式会社リアセック社・学校法人河合塾の共同開発)を用いる。分析の結果、学生の特徴として、リテラシー・コンピテンシーとも様々なレベルの学生の存在が明らかになった。また、伸長に関わる要因として、大学での目標の明確度やキャリア・地域活動への関心度に関係があることが明らかになった。今度の課題として、学生の特徴に応じた教育方法の開発や教育課程の見直しの必要がある。</p>																			
<p>2. 活動内容</p> <p>●各年度の受検人数</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>学年</th> <th>2015年度</th> <th>2016年度</th> <th>2017年度</th> <th>2018年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>845</td> <td>811</td> <td>809</td> <td>903</td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>706</td> <td>633</td> <td>814</td> <td>774</td> </tr> </tbody> </table> <p>●リテラシーの測定 「新しい問題や経験のない問題に対して、知識を活用して問題を解決する能力」と定義 「情報収集力」、「情報分析力」、「課題発見力」、「構想力」、「言語処理能力」、「非言語処理能力」を測定</p> <p>●コンピテンシーの測定 「周囲の状況にうまく対処するために身につけた、意思決定・行動指針などの特性」と定義 ・対人基礎力 —— 親和力、協働力、統率力 ・對自己基礎力 —— 感情抑制力、自己創出力、行動持続力 ・対課題基礎力 —— 課題発見力、計画立案力、実践力</p> <p>※研究への参加人数：学生6,298人</p>					学年	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	1年	845	811	809	903	3年	706	633	814	774
学年	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度															
1年	845	811	809	903															
3年	706	633	814	774															
<p>3. 成果</p> <p>●測定の結果得られた強化すべき要素と対応策(例)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>強化すべき要素</th> <th>目指すべき状態</th> <th>対応策</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>協働力</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ●人から相談された際に、本人がやる気が出るよう働きかけができる ●雰囲気づくりなどを通じてチームに貢献できる ●誰かを支援する時には全力でサポートする ●周囲との協力や働きかけを通じて、チームの成果に貢献することができる </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ●相手の意図をよく考えて返答するように指導している ●各自が持っている知識や情報を体系立てて整理し発表する機会を設ける ●互いに協力し、補い合いながら、課題を遂行するようにさせる </td> </tr> </tbody> </table> <p>本研究での成果については、以下論文にて報告した。 十文字学園女子大学 地域志向教育研究プロジェクト 研究成果論文集2014～2018,165-172</p>					強化すべき要素	目指すべき状態	対応策	協働力	<ul style="list-style-type: none"> ●人から相談された際に、本人がやる気が出るよう働きかけができる ●雰囲気づくりなどを通じてチームに貢献できる ●誰かを支援する時には全力でサポートする ●周囲との協力や働きかけを通じて、チームの成果に貢献することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ●相手の意図をよく考えて返答するように指導している ●各自が持っている知識や情報を体系立てて整理し発表する機会を設ける ●互いに協力し、補い合いながら、課題を遂行するようにさせる 									
強化すべき要素	目指すべき状態	対応策																	
協働力	<ul style="list-style-type: none"> ●人から相談された際に、本人がやる気が出るよう働きかけができる ●雰囲気づくりなどを通じてチームに貢献できる ●誰かを支援する時には全力でサポートする ●周囲との協力や働きかけを通じて、チームの成果に貢献することができる 	<ul style="list-style-type: none"> ●相手の意図をよく考えて返答するように指導している ●各自が持っている知識や情報を体系立てて整理し発表する機会を設ける ●互いに協力し、補い合いながら、課題を遂行するようにさせる 																	

地域課題解決型研究推進費 No.10	
研究課題名	生活習慣病などの疾病と食事・運動との関連についての検討
研究代表者	松本 晃裕 (食物栄養学科 教授)
共同研究者	岡本 節子 (食物栄養学科 准教授)、和田 安代 (食物栄養学科 講師) 福田 平 (国際栄養食文化健康研究所 非常勤研究員、神奈川県立保健福祉大学准教授) 目黒 美葉 (国際栄養食文化健康研究所 非常勤研究員)
<p>1. 概要</p> <p>高齢化社会を迎え、高齢者人口が急激に増加してきたが、糖尿病、高血圧症、脂質異常症、心疾患などの生活習慣病の患者が増加してきており、また十分に体を動かさなくなるというサルコペニア患者も増加してきているという問題が生じてきた。昨年度に引き続き本年度も、①糖尿病患者の食事調査、運動習慣調査、サルコペニアの有無、体組成、血糖、血中ビタミンD濃度などの測定を行い、糖尿病患者ではサルコペニアが多いのか、またその原因について食習慣と運動習慣を中心として研究を行った。②心臓リハビリテーション患者において、全身持久力の指標である最大酸素摂取量、心機能の指標である運動時の心拍出量・心仕事量、運動習慣調査、骨格筋量などの体組成、血糖・血中脂質などの測定を行い、心疾患と運動習慣・骨格筋量・全身持久力・心機能との関連や、心臓リハビリテーションがサルコペニアを予防できるかなどの研究を行った。</p>	
<p>2. 活動内容</p> <p>研究① 外来通院中の高齢者糖尿病患者に対して、昨年からの研究を継続し、合計36名の患者を検討した。本研究は本学大学院生でもある武蔵野赤十字病院栄養科の原純也氏(管理栄養士)の修士論文にまとめたが、同病院の糖尿病代謝内科の医師との共同研究として行った。 測定項目：食事調査、運動習慣の調査、血液検査(血糖、HbA1c、血中ビタミンDなど)、インピーダンス法による体重・筋肉量・体脂肪量、身長、BMI、握力など。</p> <p>研究② 外来通院中および入院中の心疾患患者を対象として平成29～31年度の間に、獨協医科大学病院ハートセンター 中島敏明教授のチームと連携して研究を行っている。 測定項目：運動習慣の調査、全身持久力の指標である最大酸素摂取量の測定、心機能の指標である運動時の心拍出量・血圧・心仕事量、血液検査、インピーダンス法による体重・筋肉量・体脂肪量、身長、BMIなど。</p> <p>※研究への参加人数：学生1人、教職員2人、他の病院職員10人</p>	
<p>3. 成果</p> <p>研究① 高齢糖尿病患者はサルコペニアよりは筋力低下が先行するダイナペニアの患者が多いと考えられた。高齢糖尿病患者では血中25-OHビタミンD濃度が欠乏している者が女性において大半を占めた。男性においてサルコペニアの罹患率、除脂肪量や上腕筋筋量は、加齢の影響を受けることがわかった。さらに高齢糖尿病患者では骨格筋量と栄養状態が関係があることがわかった。</p> <p>研究② 心臓リハビリテーションを行なっている心疾患患者10名を対象として、研究を行なった。心不全の重症例では運動中における心拍出量の増加量が少なく、また心仕事量の増加量も少ないことがわかった。平成31年度も症例数を増やして、さらに研究を継続する予定である。</p> <p>本研究の結果より、高齢糖尿病患者における食習慣・栄養状態が筋力低下や筋肉量低下と関連があることが明らかとなった。近年、糖尿病患者が増えているが、筋力や筋肉量の低下が起こるサルコペニアの有病率も糖尿病患者では多いことと、さらに糖尿病患者ではビタミンD低下も生じている者が多いことがわかった。これらの結果は今後、家庭での食事をどのように改善していくべきか、また病院や高齢者施設などにおいて管理栄養士などがどのように対応すれば良いかについての有益な知見になると考えられたが、埼玉県内の病院・高齢者施設での食事の対応にも十分活用できると期待される。尚、本研究は下記学会にて発表した。</p> <p>「高齢者糖尿病におけるサルコペニアの有病率と関連因子の検討」 原 純也、遠藤 薫、佐伯 浩介、山下 大翔、早川 恵理、和田 安代、杉山 徹、松本 晃裕 第5回日本サルコペニアフレイル学会 2018年11月11日</p>	

地域課題解決型研究推進費 No.11

研究課題名	ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業
研究代表者	久保田 葉子 (児童教育学科 講師)
共同研究者	狩野 浩二 (児童教育学科 教授)、棚谷 祐一 (メディアコミュニケーション学科 准教授) 久保 裕子 (学生支援課) 新座市教育委員会教育総務部生涯学習スポーツ課、新座市立第二中学校 伊藤進校長

1. 概要

ふるさと新座館ホールのスタインウェイ・ピアノの活用促進と、地域の公共ホール活性化を目的として、新座市教育委員会との共催(後援:新座市、新座市文化協会)で、「ふるさとにいざオータムコンサート」を開催した(出演はオペラ歌手の北澤幸氏、本学児童教育学科の学生6名、久保田葉子)。公演に先立ち、新座の歴史や自然をテーマにした朗読詩「野火止の水と緑と」を本学学生が新座市立第二中学校の全校生徒930名の前で発表した。

2. 活動内容

春	プログラムの構成・選曲とリハーサル開始
7月	チラシ・ポスターの作成 HP等で公演情報の告知、チラシ配布・ポスター掲示
8月	葉書・メールによる申し込み受付開始 当日配布の印刷物の作成
9月	新座市立第二中学校にて朗読詩「野火止の水と緑と」を発表 出演:児童教育学科1年生7名(須賀千夏、染谷礼奈、高荷彩佳、高橋夏希、都藤里彩、中村美月、夏加志穂)
10月	「ふるさとにいざオータムコンサート」開催 出演:児童教育学科1年生6名(須賀千夏、染谷礼奈、高荷彩佳、高橋夏希、都藤里彩、夏加志穂)、受付・誘導:人間福祉学科3年生1名(赤羽愛美)同2年生2名(久保千紜、高橋奈々)、児童教育学科3年生1名(大屋郁美)、同2年生1名(中江美菜)、録音・撮影:メディアコミュニケーション学科4年生1名(清水帆南)
10月~11月	アンケートの集計、記録映像・写真の整理、企画の振り返り



※研究への参加人数:学生13人、教職員10人、自治体関係5人、地域団体10人

3. 成果

コンサートは4年目の開催となる。来場者数が毎年増加して今回は208名となった。童謡誕生(「赤い鳥」創刊)100周年にちなんだ日本の歌、オペラアリア、ピアノによるクラシック音楽と、児童教育学科の学生による手話ソング「花は咲く」に加え、オリジナル朗読作品「野火止の水と緑と」を発表し、来場者アンケートで継続を望む声や多くの反響を得た。朗読詩の楽譜は新座市教育委員会を通じて市内の全小中学校に寄贈した。練習の際には2017年度の「ふるさとにいざオータムコンサート」や「地域連携フォーラム」に出演して朗読詩の初演や再演に携わった学生が後輩に指導を行い、学科や学年を越えた学びあいがあった。



新座市立第二中学校にて



朗読詩



手話ソング

地域課題解決型研究推進費 No.12

研究課題名	学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み
研究代表者	布施 晴美 (人間発達心理学科 教授)
共同研究者	風間 文明 (人間発達心理学科 教授)、加藤 陽子 (人間発達心理学科 准教授)、 平田 智秋 (人間発達心理学科 准教授)、長田 瑞恵 (幼児教育学科 教授)、 安田 哲也 (東京電機大学理工学部)、倉片 博章 (新座市社会福祉協議会 総務課管理係長)、 新座市こども未来部保育課

1. 概要

- 平成26年度から29年度までのCOC事業として、新座市と連携し新座市内の放課後児童クラブ(以下、学童保育)の支援を検討し展開した。具体的な支援展開は平成28年度から①学童保育の児童対象の体験型イベントの企画実施、②学童保育職員の専門性や質の向上を目指すための研修会の開催、そして、③学童保育職員の職務に対する使命感やストレス等に関する調査を近隣地域にて実施してきた。
- 平成30年度も新座市の放課後児童クラブの児童・学童保育職員を支援するために、これまでの活動①②を継続的に推し進め、本学の地域貢献の基盤固めに重点を置く。また、③学童保育職員対象の調査については、対象を前回調査の大学近隣地域から埼玉県全域に広げて実施した。

2. 活動内容

- ①児童の体験型イベント(凧作り凧揚げ)(平成30年12月27日)の開催
これまでは会場を本学としていたが参加できる学童保育施設が限られてしまうため、今年度は学生と共に現地に赴き開催した。新座市陣屋放課後児童保育室で開催し、児童45名が参加した。学生にはイベント開催に向けて凧作りの材料作成と凧作り凧揚げの体験をしてもらい、当日児童を指導できるように準備した。
- ②新座市学童保育職員全員を対象とした研修会(平成31年2月21日)の開催
昨年度の実績と照らしながら事前打ち合わせから、「子どもの発達と気になる子ども」、「集団と対人関係」、「子どものアレルギーの対応」[「集団遊びの実践例」]の4分科会(昨年は3分科会)を設けた。参加者は100名を超えた。各分科会講師は、本事業の教員および外部講師が担当した。研修会運営に学生の協力も得た。
- ③新座市を含む3市の学童保育指導員対象質問紙調査(平成31年1~2月に実施)の実施
調査は埼玉県学童保育連絡協議会の協力を得て実施した。300名に配布し、現在約150名(回収率50.0%)から回答を得ている。質問紙のデータ入力には学生に依頼し、質的な部分の入力を通して、学童保育職員の実情を知る機会になったと思われる。今後データの解析を進め、学会等で発表する予定である。

※研究への参加人数:学生30人、教職員7人、行政機関等2人、地域団体等120人、児童45人

3. 成果

- ①児童の体験型イベント(凧作り凧揚げ):現地に赴き小学校の校庭で凧揚げを実施したことにより、小学校の教員も見学に来て、児童の成果を褒めてくれたことが、児童の自己肯定感をさらに高めることにつながった。今後も新座市と連携し、学童保育の児童対象のイベントについて学生と企画していくことを模索していきたい。
- ②学童保育指導員対象の研修会:開催日時を学童保育の勤務時間内に設定し、多くの職員の参加が可能となった。研修会は好評であり、COC事業としては終了であるが、新座市と連携し来年度以降も開催を検討していきたい。
- ③埼玉県全域の学童保育指導員対象質問紙調査の実施:現在回収できたデータ入力は終了しており、今後解析に入る。解析結果については、紀要や学会などに公表していく予定である。
COC事業としての5年間の活動を振り返り、地域との連携の中で放課後児童クラブへ大学が果たすことができる役割を見出すことができた。



学生の自己紹介

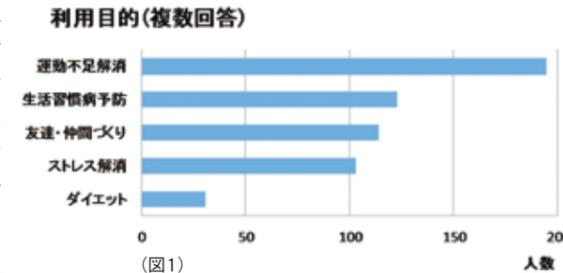
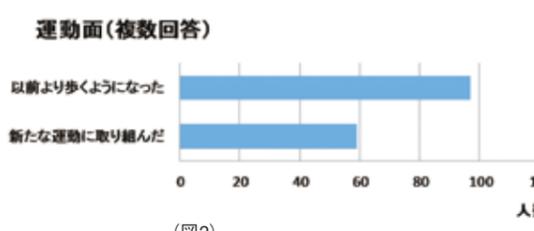
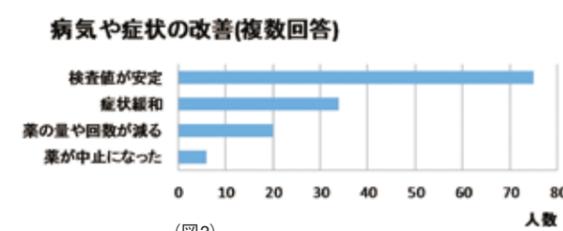


凧作り制作の指導中



凧揚げを楽しむ

地域課題解決型研究推進費 No.13	
研究課題名	乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業「+(プラス)ママの子育てサロン」開催と有効性の検討
研究代表者	上垣内 伸子 (幼児教育学科 教授)
共同研究者	向井 美穂 (幼児教育学科 教授)、伊集院 理子 (同学科 教授)、山田 陽子 (同学科 教授)、川喜田 昌代 (同学科 准教授)、横井 紘子 (同学科 准教授)、権 明愛 (同学科 講師)、鈴木 晴子 (同学科 講師)、渡邊 孝枝 (同学科 講師)、近藤 有紀子 (同学科 助教)、関根 左也佳 (同学科 有期助手)、金勝 裕子 (同学科 非常勤講師)、加藤 陽子 (人間発達心理学科 准教授)、中谷 えりか (附属幼稚園 教諭)、辻 あゆみ (附属幼稚園 教諭)、松野 さおり (教職支援課) 協力者(プラスママ)：近隣在住の幼児教育学科02年度入学の卒業生(池田 愛加・西尾 瑞枝)03年度入学の卒業生(上妻 祥子・荒井 友美・古島 繭子・山口 美弥)04年度入学の卒業生(西村 由里子・島根 直美)05年度入学の卒業生(榊原 友佳)06年度入学の卒業生(江利川 理恵)計10名
1. 概要	<p>乳幼児を持つ親の育児不安傾向や育児力そのものの弱体化が指摘されて久しい。乳幼児の発達や世話の知識・技能の乏しさなどを背景にもつそのような親子にとって、高い保育実践力(子どもと遊び育てを楽しむ力)を持った子育て仲間との交流は、子育てを楽しむ育児力の獲得につながる意義ある体験となる。そこで、幼児教育学科卒業生のうち、現在家庭で子育て中の保育経験者が、幼稚園教諭や保育士としてこれまで培ってきた保育実践力を活かして行う、新座市とその近隣に住む乳幼児とその親の子育ち・子育て支援事業を継続的に開催した。大学が卒業生のキャリアを活用しさらにそのエンパワメントを支えつつ、地域の子育てに貢献する子育て支援事業であり、学生の子育て支援活動の実践と指導を行う場としての機能も持つ。平成30年度は前年度までに引き続き、子どもの自発的な遊びの充実を軸におく支援内容の開発、気になる親子への支援の充実、自然豊かなキャンパス特性を活用した活動の工夫、新座市子育て支援課との連携の緊密化、学生へのOJTの役割の充実化を試みた。</p>
2. 活動内容	<p>①ピア・サポート形式の子育て支援事業結果の分析と課題の整理。キャンパスのもつ子育て支援のインフラとしての特性の活用、子ども同士の関係構築、子育てのリスク支援、学生の参加とOJTとしての有効性について検討。</p> <p>②新座市子ども支援課、市内子育て関連施設、附属幼稚園と連携した広報。地域の広報媒体を活用した情報発信。</p> <p>③「プラスママの子育てサロン」の計画立案と継続的開催と終了後のカンファレンス(6月～3月まで15回開催)／プラスママ(子育て支援に携わる卒業生)10名(幼児教育学科02生、03生、04生、05生、06生)。参加者延べ数:保護者254名、子ども276名、スタッフ101名、スタッフの子ども96名、学生47名。</p> <p>④子育てのインフォーマルな相談とアドバイス(教員)、スタッフによる親子関係構築支援。</p> <p>⑤学生の保育参加と絵本、手遊び等の機会提供、卒業研究支援、OJTによる関わりと環境構成への助言指導。</p> <p>※ 研究への参加人数：学生延47人、教職員14人、行政機関等3人</p>
3. 成果	<p>平成26-27年度の試行的開催を経て、28年度から年間を通して月1-2回の継続的な開催(今年度は15回)となり、29年度は前年度比1.7倍の参加者増の783名、30年度はほぼ29年度と同様の状況(801名参加、254組の親子の利用)が見られ、地域の子育て支援事業としての定着がみられた。事業評価と改善を目的として12-3月に実施した、継続参加者対象の参加の動機、継続利用の理由、本事業の特徴などに関するアンケート調査からは、保育者としての専門性を活かした支援の質の高さへの評価と安心感、大学キャンパスのもつ環境の魅力と教職員、学生から見守られ育まれている心地よさ、附属幼稚園との連携が指摘され、大学が卒業生の専門性を活用して行う子育て支援事業の有効性が示唆された。卒業研究テーマとする学生、幼児教育学科以外の学生の参加もあり、学生のOJTの場としての有用性が、継続的に関わってきた学生自身にも実感されていることも確認出来た。</p>
	 <p>室内遊び サブアリーナで親子運動遊び 芝生でシャボン玉遊び 木陰でランチ</p>

地域課題解決型研究推進費 No.14	
研究課題名	新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究
研究代表者	加藤 則子 (幼児教育学科 教授)
共同研究者	志村 二三夫 (学長)、長澤 伸江 (大学院人間生活学研究科 教授)、井上 久美子 (食物栄養学科 准教授)、布施 晴美 (人間発達心理学科 教授)、富井 友子 (人間福祉学科 講師)、名塚 清 (地域連携推進機構)、横山 徹爾 (国立保健医療科学院生涯健康研究部 部長)、藤田 誠一 (健やか食育エコワーク 代表)
1. 概要	<p>新座市において高齢化が進む中で、生活習慣病やそれに伴っておこる寝たきりや認知症等の要介護状態の人の増加が社会問題となっている。個人の健康づくりを地域社会全体で支え、多様な地域活動との連携によって健康づくりを推進し健康長寿を目指したまちづくりを推進する必要がある。健康日本21(第2次)を背景に、新座市では第2次いきいき新座21プランが策定され、食育推進をはじめとした各種行動計画に落とし込まれ、様々な取り組みが精力的に展開されている。新座市における健康づくり活動の客観的評価を行う事により、より効果的な取り組みにつなげてゆくことを目的とする。</p>
2. 活動内容	<p>新座市健康福祉関連4課の課長・副課長からニーズを吸い上げたところ、介護保険課から、介護予防・生活習慣病予防・健康増進のための地域の健康づくりを目指した、健康のまちにいき推進事業「いきいき元気アップ広場」の事業評価の要望があったため、2017年度にアンケートを開始した。新座市いきいき健康部に協力を得て、「いきいき元気アップ広場」参加者に手渡し、自宅へ回答し、返信用封筒を用いて郵送によって返送してもらった。回答に要する時間は10分程度である。平成30年3月に質問紙の手渡しを開始し、3月中旬に149件の回答が得られ、平成29年度事業として集計結果を報告した。2018年4月及び5月には83例からの回答があった。これを追加して232件に関する集計を行った。野火止東集会所での同事業の実施状況を視察し、担当者らと事業実施に関する問題点などについて会談した。2018年2月には介護保険課課長・副課長を交えて本学教員有志が意見交換を行い、追跡調査の可能性も含めた今後の取り組み方に関して意見交換を行った。学生2名は収集データの整理作業に関わった。</p> <p>※ 研究への参加人数：学生2人、教職員8人、行政機関等5人、地域団体等1人</p>
3. 成果	<p>232名のうち女性が201名(86.6%)、年齢は76.0±5.3(平均±標準偏差)歳であった。現在の健康状態を良好としたものが71名(30.6%)、やや良好としたものが116名(50.0%)で合わせると8割を超えた。参加の目的として、84.1%のものが運動不足解消を挙げ、生活習慣病予防や友達・仲間づくり等がそれ続いた(図1)。これまで利用した回数は160名(69.0%)が10回以上だった。参加によって新たに生活習慣で取り組むようになったものが198人で85.3%、うち運動面では以前より歩くようになったものが198人(図2)、健康管理面では血圧を測定するとしたものが最も多かった。参加後に検査値が安定したものが32.3%で最も多く(図3)、参加することでの日常生活の変化として、気持ちが前向きになったものが45.7%で最も多かった。参加したワンポイントアドバイスのテーマとしては、脳トレーニング、認知症予防、感染予防が多く、5割以上が参加していた。</p>
	 <p>利用目的(複数回答)</p> <p>(図1)</p>
	 <p>運動面(複数回答)</p> <p>(図2)</p>
	 <p>病気や症状の改善(複数回答)</p> <p>(図3)</p>

地域連携創造・支援事業費 No.15	
研究課題名	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発
研究代表者	金高 有里 (食物栄養学科 講師)
共同研究者	名倉 秀子 (食物栄養学科 教授)、岡本 節子 (食物栄養学科 准教授)、工藤 貴子 (食物栄養学科 助手)
<p>1. 概要 実学教育の一環として、食物栄養学科の学生ができるだけ早期に社会との関わりを持ち、即戦力を養うことで、将来の管理栄養士としての活躍の可能性を広げるため、新座市周辺の地域に密着した企業/店舗/住民/団体との共同事業により、地域の食材を用いた商品開発や、イベントの企画を行うこととした。また、地域の食材を扱い、学生が埼玉の食文化や食材の栄養学・調理学的な観点からも食材について学びを深め、地域に住む消費者の意見や企業/団体側にたった観点を学び、振り返りを行うことで地域の住民へ浸透可能な戦略についても学ぶこととした。</p>	
<p>2. 活動内容 1.かわごえ里山イニシアチブとの連携 団体の所有する田んぼに通い、草や虫などの田んぼに住む食べられる食材について、地域の方と一緒に探し、調理をした。また、その田んぼに生えているマコモタケというイネ科の植物について特性や栄養学的な特徴などについて学び、その活用レシピを検討した。また、玄米を用いたα化米の検討および、マコモタケ入り炊き込みご飯のα化米を開発した。 2.JAあさか野、新座市との連携(からだにベジプラスプロジェクト) 学生の主体性を重んじながら、JAあさか野との共催によって、レシピ提案、試作調理、商品戦略、プロモーション戦略、経営管理、店頭販売、振り返りといった様々な過程を進め、地域の食材(特に野菜を中心に)をつかったお弁当やお菓子を開発し、その販売利益を震災のあった北海道へ義援金として送るためのイベントを立ち上げた。各ステージにおけるPDCAサイクルに従ってディスカッションを行いながら、JAあさか野や新座市、かわごえ里山イニシアチブとともにイベント開催に至る準備を進めた。 3.保育園における調理実習を中心とした食育活動 新座市内の保育園において、学生と園児が共に実施することができる調理実習を開催した。</p> <p>※ 研究への参加人数：学生11人、教職員4人、地域団体等5人、企業5人、その他1人</p>	
<p>3. 成果 1.かわごえ里山イニシアチブ 地域の田んぼに訪れることによって、自然の生態系を学び、新規食材について学び深めることができた。また、その調理を一緒に行うことにより、地域住民との交流を持ち、考え方を学ぶことができた。 2.JAあさか野、新座市との連携(からだにベジプラスプロジェクト) 開発した商品(お弁当やお菓子)は、イベント開催において地域住民に届けられた。学生が企業の方々、地域の住民の方々の反応と直接向き合うという貴重な経験となった。また、企業・大学・住民が手を取り合い、産学民の連携で地域にアクションを起こすことで、地域からの大きな反響を受けることができた。それぞれの立場の者同士が一つの目標をもって地域へ進出していくことは、多くの成長を得られる良い機会となった。 3.保育園における調理実習を中心とした食育活動 学生にとっては、学内で学習した内容を展開していく貴重な場となった。園児、学生双方にとって一緒に食材を学び、調理をして食べるという素晴らしい経験が得られた。</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div> <p>かわごえ里山イニシアチブとの会議の様子 新座野菜deっけぱれ弁当 からだにベジプラスプロジェクトの様子</p>	

地域連携創造・支援事業費 No.16	
研究課題名	地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用
研究代表者	小林三智子 (食物栄養学科 教授)
共同研究者	曾矢 麻理子 (食物栄養学科 助手) 竹田 健次 (株式会社 竹田商店) 生田目 公美枝 (新座市 市民生活部 経済振興課 農業支援係長)
<p>1. 概要 地場野菜の有効活用を目的に加工食品の開発に取り組み商品化を目指して活動した。新座市はにんじんの一大産地であることから、にんじんドレッシングの開発に着手し、平成28年度に商品化、3年継続して製造に至っている。消費者や地域のニーズからドレッシングのシリーズ化を進め、平成30年度に地場ごぼうを活用したドレッシングを商品化した。販路の開拓やリピート率の向上を目指してドレッシングを用いたレシピを考案し、リーフレットを作成、販売促進に繋げた。また、スイーツの考案も行い、今年度はにんじんを用いたスコーンを地域の催事や学内の文化祭で発表し、地場野菜の有効活用方法として提案した。</p>	
<p>2. 活動内容 ①農業体験(平成30年6月～平成31年1月まで 学生3名参加) 市内の農家(高橋農園)にて農業体験を実施。ジャガイモ、にんじん、大根等の収穫や出荷前作業を行いながら、各野菜の特徴や栽培方法、また新座市の農業について学んだ。 ②ドレッシングの開発及びリーフレットの作成(平成30年6月～平成31年3月学生6名参加) 平成29年度から着手しているごぼうのドレッシングを商品化に向けて改良した。平成30年度よりノンオイルドレッシングとしたことから、従来の調味料の配合を見直し、調整を行った。ごぼうは褐変しやすいことから下処理方法を何種類か検討し、官能評価を行って消費者のイメージに沿ったごぼうの色の調査を行った。2種類のドレッシングが商品化されたことから、販売促進を目的にそれぞれのドレッシングに合う料理を掲載したリーフレットを作成した。また、市内の催事だけではなく、丸広百貨店(川越店)の朝市にも出店し、新座市内を超えた地域にも活動を発信した。 ③地場野菜を用いたスイーツの開発(平成30年6月～11月 学生3名参加) ドレッシングのリーフレット 地場ににんじんを用いたスイーツとして、今年度はにんじんスコーンを作成した。新座市商工会が主催する「すぐそ新座発見ウォーキング」と学内の文化祭で販売、レシピを提供し、地場野菜の活用方法として地域へ発信した。</p> <p>※ 研究への参加人数：学生6人、教職員2人、行政機関等1人、企業1人</p>	
<p>3. 成果 学生は、農業体験をすることで食材の有難みを知り、将来管理栄養士職に就いた時にも役立つ貴重な経験をしたといえる。また、加工食品の開発を通して食品開発に興味を持ち、地域の企業にも目を向ける契機になった。3年間継続して製造することができた「にんじん畑ドレッシング」は課題となっていた製造までの流れが確立したといえ、地域への定着も伺えた。 第2弾として「ごぼう畑ドレッシング」を商品化したことで、販路が広がり、丸広百貨店(川越店)において地域開発のギフトとして取り扱われることになった。「ごぼう畑ドレッシング」の商品化が東京新聞と日本農業新聞に掲載され、販売場所や本学科の見学希望の問い合わせがあるなどの反響があった。本活動を通して、食の安全・安心に対するニーズが地域の消費者にあることが分かった。</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>農業体験 朝市への出店</p>	

地域連携創造・支援事業費 No.17																															
研究課題名	子育て講座「はらっぱ」の開催による地域へ向けての子育て支援事業																														
研究代表者	川喜田 昌代 (幼児教育学科 准教授)																														
共同研究者	横井 紘子 (幼児教育学科 准教授)、権 明愛 (幼児教育学科 講師) 関根 佐也佳 (幼児教育学科 助手) 十文字 佑子 (十文字女子大附属幼稚園 園長)、高橋 玲子 (同園 教諭)																														
<p>1. 概要</p> <p>子育て講座「はらっぱ」は、本学と附属幼稚園との共同企画・主催により、地域の未就園児や入園希望児の保護者、附属幼稚園の保護者を主な対象として開催している子育て講座である。</p> <p>本事業は、地域の乳幼児の保護者を対象とした子育てセミナーの内容の検証とカリキュラムの開発に位置づけ、附属幼稚園で開催される子育てセミナーを基盤に、そこから徐々に地域へと輪を広げ、大学による地域子育て支援事業の可能性を検討するものである。子育て講座の目的は保護者にとって最も関心のある身近なテーマと大学教員の専門的知識とが有機的につながるような内容を考えて講座を組み立て、保護者が子育てに追われる日常の中で、楽しみや喜びを見出し、希望をもって子育てを行う手助けとなることである。</p> <p>2. 活動内容</p> <p>(1) 子育て講座「はらっぱ」を6月から1月までの期間で5回開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ● テーマについては、昨年度のアンケート結果より、幼稚園生活での育ちの過程や大切にしている内容について等の講演内容の要望に応え決定した。 ● ポスター及びチラシを作成し、近隣地域への配布を行い広く子育て講座開催を周知する。幼稚園の保護者以外の地域の保護者にも広く呼びかける。幼稚園の保護者、地域の保護者の人数については集計をして確認する。 <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>テーマ</th> <th>講師</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>第1回</td> <td>ぐずぐず子育て</td> <td>横井 紘子 先生</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>子どもと共に創る幼稚園の生活乳幼児期の子ども心</td> <td>伊集院 理子 先生</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>幼児期の育ちで大切にしたいこと</td> <td>川喜田 昌代 先生</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>子どものねがい、親のねがい</td> <td>権 明愛 先生</td> </tr> <tr> <td>第5回</td> <td>絵本の中の子どもたちと会いましょう</td> <td>山田 陽子 先生</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) アンケート調査による参加者の意見を参考に今年度の講座内容や実施方法を振り返り、次年度の開催に活かすことにより継続的な開催を目指す。</p> <p>(3) 「はらっぱ」講演記録集を作成して、地域の子育て支援関連機関に配布することで、本講座の目的や内容の理解を促す。又、子育て講座の写真を掲載する場合には、事前に参加者に説明して許諾を得る。</p> <p>(4) 各講義の振り返りを実施し、成果と課題を明らかにして、事業内容の充実を図る。</p> <p>※ 研究への参加人数：学生5人、教職員6人、地域団体等113人</p> <p>3. 成果</p> <p>(1) 各講演における参加者数</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>第1回</th> <th>第2回</th> <th>第3回</th> <th>第4回</th> <th>第5回</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>参加者数</td> <td>36人</td> <td>18人</td> <td>24人</td> <td>16人</td> <td>19人</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) 教育・社会貢献への還元方法</p> <p>本事業は、現在子育てをしている保護者に対する地域貢献活動の一つとして位置づけられる。また、講演記録集を講座へ参加した保護者、市役所、幼稚園へ配布することによって、広く事業内容を還元することができたと考える。</p> <p>(3) 得られた成果と意義</p> <p>2018年度の講演会では、長年、幼児教育の現場に携わってきた、または現在子育て中の方を講師として招聘した。そのため、来場した保護者の方々にとって身近で共感できる話題提供を行うことが可能となったことがアンケート結果からも認められた。また、来場者の内訳は在園児父母53名、一般来場者60名(新座市、朝霞市、志木市、清瀬市、東久留米市からの来場)となっており、学外からの来場者が多数を占めたことから、本事業の活動を広く地域に貢献することができたと考える。</p> <p>また、講演によっては子どもの育ちが現れている絵本の実物を提示する講演も行われ、来場者が実際に絵本を手に取りじっくりと鑑賞していた様子が認められた。来場した保護者にとって興味深い講演を行えたことが想定される。さらに、全ての講演後には講師と来場者が自由に話をできる時間が設けられており、個別に子育てに関する相談や質問を行う来場者が多数認められた。来場者の多くは幼児を伴い講演に参加をしていたが、講演会場の隣に保育室を設け、扉を解放し保護者と子どもの出入りを常に自由にしてきた。このように、会場が幼稚園内であり、来場者にとって安心した環境で講演会を開催するという本事業独特の環境設定も、来場者が講演内容に耳を傾けることができ、相談や質問の行い易さに関係していたことが想定される。</p> <p>これらのことから、本事業は、目的である保護者が子育てに追われる日常の中で、楽しみや喜びを見出し、希望をもって子育てを行う手助けとなることが達成されたと考えられ、地域貢献活動として意義深い活動となったことが考えられる。</p>			テーマ	講師	第1回	ぐずぐず子育て	横井 紘子 先生	第2回	子どもと共に創る幼稚園の生活乳幼児期の子ども心	伊集院 理子 先生	第3回	幼児期の育ちで大切にしたいこと	川喜田 昌代 先生	第4回	子どものねがい、親のねがい	権 明愛 先生	第5回	絵本の中の子どもたちと会いましょう	山田 陽子 先生		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	参加者数	36人	18人	24人	16人	19人
	テーマ	講師																													
第1回	ぐずぐず子育て	横井 紘子 先生																													
第2回	子どもと共に創る幼稚園の生活乳幼児期の子ども心	伊集院 理子 先生																													
第3回	幼児期の育ちで大切にしたいこと	川喜田 昌代 先生																													
第4回	子どものねがい、親のねがい	権 明愛 先生																													
第5回	絵本の中の子どもたちと会いましょう	山田 陽子 先生																													
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回																										
参加者数	36人	18人	24人	16人	19人																										

地域連携創造・支援事業費 No.18	
研究課題名	学生と共に考える大学キャラクターの活用とその展開 ―みんなにプラス!これからもプラス!―
研究代表者	星野 祐子 (文芸文化学科 准教授)
共同研究者	安達 一寿 (メディアコミュニケーション学科 教授)、飯田 路佳 (健康栄養学科 教授)、 棚谷 祐一 (メディアコミュニケーション学科 准教授)、 加藤 亮介 (メディアコミュニケーション学科 講師)、 名塚 清 (地域連携推進機構)、和井田 慎吾 (募集広報課)、工藤 奈緒 (同課)、 原 一彰 (学生支援課)、安達 美奈子 (研究支援課)、 大木 さおり (新座市総合政策部シティプロモーション課)、須藤 佑輔 (同課)
<p>1. 概要</p> <p>COC活動の充実とともに地域イベントには欠かせない存在となってきた「プラスちゃん」。事業終了後も、「プラスちゃん」が地域や「みんなに」“これからも”プラスになることを期待して、活動の記念となる動画を制作した。撮影テーマは、新座市の“これから”を考え定住促進のPR。市・学生と相互にアイデアを出し合い、学生が絵コンテを作成した。出演者は新座市役所職員、本学学生で、家族の一日を描く。撮影にあたっては、JR東日本(新座駅)、東武鉄道(志木駅)、EQUIA志木(志木駅商業施設)、新座農産物直売センター(とれたて畑)、アイ工務店(モデルハウス)の皆さまにご協力いただいた。そして、家族を見守る愛らしいキャラクターとして「ゾウキリン」と「プラスちゃん」が登場。コミカルなシーンが動画に遊び心をプラスした。また、例年通り、学生主体のイベントを実施し、地域イベントへの参加を積極的に行った。</p> <p>2. 活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ● イベント参加 <p>特筆すべきイベントは、新座市が推進している子どもの放課後居場所づくり事業に、活動場所を提供していただき「プラスと学ぶ理科実験教室」を実施したことである。学生たちが企画し、市の関係課と調整しながら実施した。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>黒目川ウォークラリー (4/8)、FC十文字VENTUS開幕戦セレモニー (5/3)、男女共生フォーラム2018プラザまつり (6/22、23)、イオン新座夏まつり (7/16)、大江戸新座まつり (7/21)、子ども大学しき入学式 (7/30)、プラスと学ぶ理科実験教室 (8/2、7、23)、子ども大学にいざ入学式 (8/21)、新座市民体育祭 (10/7)、いろはふれあい祭り (10/13)、新座市民まつり産業フェスティバル (10/14)、志木市民まつり (12/2)、からだにベジプロジェクト応援 (12/9)、志木瑞穂の森でのクリスマスイベント (FC十文字VENTUSの高齢者施設慰問) (12/22)、ふるさと新座商店会チャリティーもちつき大会 (2/2)、志木駅南口商店会チャリティー屋台村 (2/3)、笑顔あつまれ!さいたまキッズまつり (2/24)、志木さくらフェスタ (3/31)</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ● 定住促進のためのPR動画制作 <p>関係者との事前ミーティングを重ね(5回)、ロケハン1回(いずれも学生が同行)を経て、2月18日に撮影を行った。市からは演者2名、撮影補助者の3名が、本学からは教員3名、学生11名が参加した。メディアコミュニケーション学科の学生が中心となり撮影を行い、プラスちゃんくらぶの学生が着ぐるみを動かした。その後、学生主体で編集を行い、日頃の学びを実践に活かすことができた。</p> <p>※研究への参加人数：学生40人、教職員5人、行政機関等8人、地域団体等2人、企業4人</p> <p>3. 成果</p> <p>イベント時に、立場や世代の異なる人々と交わることで、社会人基礎力を身につけることができた。また、イベントを企画、実施、振り返るというサイクルが習慣化し、イベントを動かす先輩の姿に後輩たちは多くのことを学んでいる。さらに、動画撮影企画においては、メディアコミュニケーション学科の学生とプラスちゃんくらぶがコラボレーションすることで、それぞれの良さを活かした活動を推進することができた。また、毎年度発行している「プラスレター」は、2018年度は8ページ。複数の学生で協力しながら編集作業を行うことができた。</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>プラスと学ぶ理科実験教室</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>志木駅南口商店会 チャリティー屋台村</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>新座市定住促進PR動画撮影</p> </div> </div>	

地域連携創造・支援事業費 No.19	
研究課題名	ふるさとの緑と野火止用水を育むプロジェクト
研究代表者	星野 敦子 (児童教育学科 教授)
共同研究者	松岡 敬明 (児童教育学科 教授) 星野 祐子 (文芸文化学科 准教授) 名塚 清 (地域連携推進機構) 斉藤 政登 (新座市教育委員会生涯学習スポーツ課) 佐藤 弘信 (HUG ネット会長、ボランティア団体川爺代表)
1. 概要	平成26年度にCOC事業の一環として設立された「ふるさとの緑と野火止用水を育む会 (通称HUG ネット)」(会長佐藤弘信)は、「安らぎと憩いを求め、野火止用水とその周辺の緑に人が集い、子どもが親しめる空間づくりを目指す」ことを目的として、新座市内の14団体をネットワーク化し、連携による事業を展開している。
2. 活動内容	4つのプロジェクトチームをつくり、各プロジェクトリーダーが中心となって活動を進めた。 ()内は参加学生のべ数である。 【プロジェクトA】野火止用水の環境保全 ①アジサイの強剪定 ②「プラスの森」整備作業 (8) ③樹木マップ改訂版の作成 ④樹木マップWEB公開のためのデータ作成 ⑤野火止用水沿い絵画展示・西分茶屋 (22) ⑥ふるさと新座館広場 (野火止用水公園) における餅つき大会支援活動 (25) ⑦野火止用水クリーンデー (東京都との連携) 清掃活動 (3) 【プロジェクトB】子どもの自然体験学習 ①8月 黒目川における魚取り体験 (小学生対象定員30名) (8) ②11月 本多児童センターならびに本多の森における活動 (樹木プレートづくり、竹バン・シチューづくりなど/小学生対象/定員40名) (28) 【プロジェクトC】研修事業 ①荒川下流・荒川知水資料館での研修の実施 【プロジェクトD】ホテル放流事業 ①野火止用水でのホテルの幼虫放流、観察 ②西分集会所、町内会のホテル観賞会・夏祭り (25) ※研究への参加人数：学生119人、教職員15人、行政機関等15人、地域団体等200人、地域の小学生・幼児90人
3. 成果	①野火止用水沿いの樹木やプラスの森などの樹木の剪定、伐採などを継続することにより、地域環境保全に寄与した。また樹木伐採に関する知識や技術を地域の方や学生が学んだ点も教育的意義があった。 ②子どもの自然体験学習では、子どもたちが地域の自然に親しむ機会を作るとともに、参加した学生の学びにもつながった。 ③懸案事項であった野火止用水樹木マップの改訂版を発行し、さらに「森の四季だより」と「樹木マップ」をWEBページで発信するためのデータを作成した。これまでの実績を有効な手段で発信できるようになった。 【主な成果物】「雑木林と地域の食材を生かした自然体験活動の展開」(2018.5)『こども環境学研究』Vol.14 No.1pp107、「地域環境を生かした子どものための自然体験活動の実践と評価」(2019.2)『地域志向教育研究プロジェクト研究成果論文集2014～2018』pp135-144、「自然体験活動が子どもの表現力に与える影響についてーエピソード記述による分析を中心としてー」(2019.2)『児童教育実践研究』第12巻第1号など  火で竹バンを焼く子どもたち  「HUG ネット樹木マップ」改訂版

3 「地域志向教育研究プロジェクト研究成果論文集2014～2018」の発行

5年間にわたり取り組んできたCOC研究プロジェクトの研究成果論文集を平成31年2月に発行しました。

4 地域貢献を学びと結びつけたPBL型研究の取り組み

学生の社会人基礎力の育成に繋がるPBL型(課題解決型学習)研究として、地域貢献を学びと結びつけた取り組みが行われています。

(取組事例)

- 人間発達心理学 東畑ゼミ 地域志向教育研究費採択研究プロジェクト
 - ※学生が調査・企画・実施
 - 新座市「フシギマップ」プロジェクト/民話や伝説の舞台や妖怪などを紹介する「女子大生と行く新座ふしぎマップ」を制作、魅力発信の一助として新座市に寄贈(H27)
 - シャッター街で考える心理学的地域振興/商店街でのフィールドワーク調査をもとに高齢者・若年層が共に興味を持てる商店街のブティックを素材としたファッション誌「LADY BARBA」を制作、商店街活性化の一助として新座市に寄贈(H28)
- 食物栄養学科 栄養教育研究室(井上久美子ゼミ) 卒業研究生による食育活動
 - 新座市保健センターなどの管理栄養士と連携して、「魚・だし・豆」をテーマに、学生が「和食探検隊」として子どもや高齢者への食育活動を企画・実施(H28)
 - 「やさいはかせになろう!」をテーマとして、学生が東野ココフレンドで児童への食育活動を企画・実施(H29)
 - イオンチアーズクラブ(小中学生の環境に関する体験や学習を行うクラブ)での「エネルギー」をテーマにした食育活動を学生が企画・実施(H30)

5 地域連携共同研究所による地域志向研究

研究分野、組織を超えた連携により、本学・地域社会の発展に貢献する地域志向研究を深化させる新たな研究組織として地域連携共同研究所を平成27年4月1日付けで設置しました。

健康長寿のまちづくりをテーマとした研究課題などを中心に、地域志向の研究プロジェクトに取り組み、研究実績をまとめた「地域連携共同研究所年報」を毎年度発行しています。

(平成27年度～平成30年度 地域連携共同研究所の採択研究プロジェクト)

No.	研究プロジェクト名	研究代表者	実施年度				
			26	27	28	29	30
1	食育で育む管理栄養士の専門性	食物栄養学科 長澤 伸江		●	●	●	●
2	十文字学園女子大学シニア健康教室	健康栄養学科 高橋 京子		●	●	●	●
3	ワークショップによる合意形成の手法の開発とまちづくりサポートのスキーム構築に関する研究	文芸文化学科 松永 修一			●	●	●
4	新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導 (※地域志向教育研究費で採択)	食物栄養学科 松本 晃裕	※	※	●	●	●
5	地域との連携によるオレンジカフェ実践への取り組み	人間福祉学科 山口 由美			●	●	●
6	新座市内介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み (※地域志向教育研究費で採択)	人間福祉学科 太田 眞智子	※	●	●		
7	小児における食物アレルギーに関する意識調査と実態調査	食物栄養学科 松本 晃裕			●		

No.1～5の研究代表者は、平成30年度の研究代表者とする

IV 社会貢献

1 産官民学連携による社会貢献活動

連携先	活動内容	実施年度				
		26	27	28	29	30
西武ライオンズ 新座市	○本学と西武ライオンズとの「連携協力に関する基本協定」(H28.4.21締結)に基づき、同球団・新座市と連携して協働事業を実施					
	●小学校でのベースボール型授業指導方法の共同研究(児童教育学科 山本悟教授)：児童教育学科授業「身体運動I」でライオンズOBが実技指導				●	●
	●西武ライオンズ(OB派遣・道具の提供)・新座市(募集)・本学(場所の提供・学生運営スタッフ)共催事業の実施 親子野球教室(H29)、幼児向け「親子でベースボール体験」イベント(H29・30)				●	●
	●西武ライオンズ主催の社会貢献事業への学生の参加 LIONS HAPPY MOTHER'S DAY、WFPウォーク・ザ・ワールド ライオンズカップ車椅子ソフトボール大会			●	●	●
新座市 (株)オーシャナイズ	○大和田ココフレンドの運営 ココフレンドの夏休み期間中の運営を企業がサポートする取り組みに学生21名が運営スタッフとして参加				●	
志木市 協賛企業	○志木市主催の減塩普及啓発イベント「おいしく減塩！『減らソルト』フェスタ」への協力参加 ●チェアエクササイズ：健康栄養学科飯田路佳教授、学生15名 ●学生考案の減塩メニューの試食コーナー：健康栄養学科 岡本節子准教授、岡本ゼミ学生8名				●	
西武所沢店	○西武所沢店のレストラン新メニューの共同開発 健康栄養学科の小林ゼミ・金高ゼミの学生が同店のレストラン7店舗の新メニューを旬の地域食材を使って共同開発し、レシピを提供(参加学生16名)				●	
イオン新座店	○地域の子どもたちが楽しめるイベントをイオン新座店と連携して学生が企画・実施					
	●東畑ゼミによる新座ふしぎ妖怪イベント			●		
	●開店記念祭「プラスちゃんくらぶ」企画イベント			●		
新座市	●夏祭り「プラスちゃんくらぶ」企画イベント				●	●
	○「健康と食に関する講演会」を新座市と共催で実施 「長寿菌」が命を守る！～大切な腸内環境コントロール～(理化学研究所 辨野義己特別招聘研究員)「食育への取り組み」(本学健康栄養学科 長澤伸江教授)、チェアエクササイズ(本学健康栄養学科 飯田路佳教授)、「運動による元気の築きと食べ物・栄養」(順天堂大学 大学院 スポーツ健康科学研究科 鈴木良雄 前任准教授)				●	
和光市文化振興社	○公益財団法人和光市文化振興公社との相互協力協定に基づき、和光市民文化センター「サンアゼリア」のイベントに学生が運営スタッフとして参加			●	●	●
新座市・朝霞市 栄四丁目商店会 その他関係機関	○「さくらまつり黒目川ウォーキング」の開催 栄四丁目商店会の地域活性化イベント「さくらまつり」に合わせて、同商店会と共催で実施(協力機関等：埼玉県朝霞県土整備事務所、新座市、朝霞市、自衛隊埼玉地方協力本部、ミョウオンサワハタザクラを守る会、畑中ホテル愛好会、チーム・キャロット、COZY & SMILE CAFE、埼玉南部読売会・読売新聞朝霞支部)	●	●	●	●	●
埼玉県南西部地域振興 センター・管内7市町・ 商工会・NPO	○「県南西部の見どころを巡る自転車ツアー」の企画協力・PR動画の制作 実行委員会(埼玉県南西部地域振興センター・管内7市町・同商工会・NPO)主催の自転車ツアーに、学生が企画段階から参加、コース開発・PR動画を制作				●	●

2 PBLによる社会貢献活動

連携先	活動内容	実施年度				
		26	27	28	29	30
ココフレンド	○東野ココフレンドでの食育活動 健康栄養学科 井上久美子ゼミの学生が「やさいはかせになろう！」をテーマに、児童への食育活動を企画・実施				●	
	○大和田ココフレンドでのニュースポーツ体験事業 健康栄養学科 高橋京子ゼミの学生が児童にタスポニーなどのニュースポーツの体験事業を企画・実施				●	●
新座市立東野小学校 和光市まちかど	○東野小学校・和光市まちかど健康相談室での食育活動 健康栄養学科 井上久美子ゼミの学生が新座市保健センター、和光市NPO法人ほけっとステーションの管理栄養士と連携して、「魚・だし・豆」をテーマに、地域の子どもたちや高齢者への食育活動を企画・実施			●		
新座市男女共同参画 推進プラザ	○新座市男女共同参画情報紙「FOR YOU」の編集協力 男女共同参画社会を若い女性が考える機会を作る趣旨で制作依頼を受け、メディアコミュニケーション学科の授業(石野榮一教授指揮)を通して学生が市内事業者へのインタビューの企画立案・実践・原稿作成				●	●

3 学生による社会貢献活動

活動区分	連携先	活動内容	実施年度				
			26	27	28	29	30
自主社会活動	新座市	○健康栄養学科ダンスパフォーマンスチームが新座市民体育祭、産業フェスティバル等に出演		●	●		●
		○ココフレンドに運営スタッフとして参加		●	●		
		○さつまいもプロジェクト：新座産さつまいもの手作りお菓子を市イベントで販売、収益で東日本大震災復興支援	●	●	●	●	●
地域志向科目の 授業	新座市	○地域連携共同研究所の研究プロジェクト「シニア健康教室」、志木市健康イベント「減塩フェスタ」(H29)にスタッフとして参加				●	●
		○地域志向科目の授業を通じた市の事業、地域イベントなどへの参加 ●「地域で学ぶ」[埼玉の地理・歴史・文化]：西分夏まつり、野火止用水ホタルの夕べ、新座市男女共同参画週間イベント、大江戸新座祭り、ふるさと新座商店会チャリティー餅つき大会など		●	●	●	●
		●総合科目「新座の祭り」とまちおこし：新座市の伝統的な祭りや阿波踊りの歴史を学ぶとともに、新座阿波おどり振興協会の指導で練習を重ね、阿波踊りに参加して地域の活性化に貢献					●
COCセンター	新座市	●総合科目「いもプロ」：新座産さつまいもの手作りお菓子を市イベント等で販売、収益で東日本大震災復興支援					●
		○ゾウキリンInstagram企画「新座愛を届けるゾウ」への参加 新座の魅力をメッセージボードで紹介して情報発信(プラスちゃんくらぶ、J和太鼓部、吹奏楽部などが参加)				●	

V その他の取り組み

1 意見交換の場

産学官民の連携を推進するための会議体として、新座市内の関係機関等で構成する「+（プラス）キャンパス連絡会議」、及び連携自治体で構成する「地域連絡協議会」を設置し、様々な地域課題の分野での取り組みや活動事例の報告、意見交換などを行いました。

年度	会議	概要
26	+（プラス）キャンパス連絡会議	○COC事業の平成26年度の取組 ○新座市との連携事業（現状、今後）の報告
27	地域連絡協議会・+（プラス）キャンパス連絡会議合同会議	○COC事業の概要と平成26年度の実績報告 ○活動事例報告：野火止用水保全推進プロジェクト、冒険遊び場ソトブレ、地域志向科目と学生の地域活動等
	第2回+（プラス）キャンパス連絡会議	○学生のボランティア活動に対する支援 人間福祉学科 佐藤陽教授の基調提起「学ぶ力と働く力を高めるボランティア体験の意義」を踏まえ、本学のボランティア支援機能の充実について意見交換
	第3回+（プラス）キャンパス連絡会議	○超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり 新座市長寿支援課、保健センターの基調提起「新座市における健康長寿のまちづくりの取組」を踏まえ、意見交換
28	第2回 地域連絡協議会（新座市との意見交換会）	○COC事業の取組状況、新座市との新たな連携事業
	地域連絡協議会・+（プラス）キャンパス連絡会議 合同会議	○COC事業の平成27年度実績報告、平成28年度事業計画 ○活動事例報告：新座市「ふしぎマップ」プロジェクト
	第2回+（プラス）キャンパス連絡会議	○新座市地方創生総合戦略（子育て支援・教育）のCOC事業と連携した施策展開
29	第3回+（プラス）キャンパス連絡会議	○新座市地方創生総合戦略（緑地保全・観光都市づくり）のCOC事業と連携した施策展開 ○大学の教育プログラムとの協働による地方創生・シティプロモーション
	第2回地域連絡協議会（新座市との意見交換会）	○平成28年度上半期のCOC事業の進捗状況 ○新座市地方創生総合戦略とCOC事業
	地域連絡協議会・+（プラス）キャンパス連絡会議 合同会議	○COC事業の平成28年度実績報告・平成29年度事業計画 ○活動事例報告：新座産にんじんを活用したドレッシングの商品化
30	第2回+（プラス）キャンパス連絡会議	○地域を学びの場とする学生の地域貢献活動 ●学生の地域貢献活動の状況報告 ●地域貢献を学びと結びつけたPBLの事例報告：東野ココフレンドでの児童への食育活動、新座市男女共同参画情報紙の編集協力
	第2回地域連絡協議会（新座市との意見交換会）	○「快適みらい都市」の実現に向けた市政運営の紹介 ○これまでのCOC事業に関する取り組み ○子育て支援に関する研究活動の事例報告：+（プラス）ママの子育てサロン、フィンランドにおける子育て支援制度（ネウボラ）の地域への応用
	第1回+（プラス）キャンパス連絡会議（H30.7.26）	○COC事業の平成29年度実績報告・平成30年度事業計画 ○シティプロモーションに繋げるCOC事業の展開 ●COC研究プロジェクトの事例報告：学生と共に考える大学キャラクターの活用とその展開 ●新座市のシティプロモーションへの取り組み
30	第2回+（プラス）キャンパス連絡会議（H31.2.7）	○COC事業の総括と今後の取り組み
	地域連絡協議会（H30.10.25）	○COC事業終了後に向けた総括 ●COC事業の現在までの総括、連携自治体へのCOC事業アンケート調査の結果（報告） ●連携市からの意見・要望等の発表、意見交換

連携先	活動内容	実施年度					
		26	27	28	29	30	
十文字元氣プロジェクト	新座市 他大学	○学生企画イベント「プラスちゃんといっしょ」 大学キャラクター交流会（宇都宮大学、成蹊大学、首都大学東京）、 大学や企業・自治体のキャラクターによる地域の子どもたちが楽しめるイベントを実施				●	
	新座市 JAあさか野	○「くまプラススイーツプロジェクト～熊本復興&新座活性化!!～」(共催: JAあさか野、後援:新座市) 食物栄養学科3年8名が熊本復興支援と新座の活性化を目的に、熊本・ 新座の特産品を使用したスイーツを考案、市内ベーカリーと共同で 商品化・販売				●	
	新座市 教育委員会	○プラスちゃんといっしょ～プラスと学ぶ理科実験教室～ 「プラスちゃんくらぶ」が大和田・東野・東北ココフレンドで「夏休 み特別企画『わくわく理科実験教室』ペーパークロマトグラフィーでオ リジナルコースターを作ろう!」を企画・実施					●
学生ボランティア 団体	新座市等	○「ゾウキリンくらぶ」が野火止用水灯明まつり、産業フェスティバルな どにボランティア参加	●	●	●	●	
部活動	新座市、 国際交流 協会等	○吹奏楽部：国際交流デー、休日議会講堂コンサートなどに出演	●	●	●	●	
		○J和太鼓部：全国交通安全運動出発式、地域イベントなどに出演	●	●	●	●	
関係機関からの 協力依頼	関係機 関等	○「春・秋の全国交通安全運動出発式」一日警察署長 ○平林寺半僧坊大祭「伊豆殿行列」への出演 ○イオン新座店「打ち水大作戦」への参加			●	●	●

(平成30年度の活動の様子)



2 成果の公開

年度	会議	概要
26	COC事業 キックオフシンポジウム	◎テーマ：COC事業のキックオフ ●基調講演Ⅰ「新座市が進めるまちづくり」須田 健治 新座市長 ●基調講演Ⅱ「COC事業のめざすもの」文部科学省大臣官房審議官 義本 博司 氏 ●パネルディスカッション「地（知）の拠点としての大学の役割について」
27	COC事業シンポジウム	◎テーマ：超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり ●基調講演「健康長寿社会を実現するSmart Wellness City」 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授 久野 謙也 氏 ●エクササイズタイム「ダンスムーブメント」 本学健康栄養学科 飯田 路佳 教授 ●パネルディスカッション「超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり」
28	COC事業シンポジウム	◎テーマ：地域を学ぶ地域で学ぶ地域に活かす ●基調講演「十文字COC～新座市をキャンパスにした学びから～」 本学 横須賀 薫 学長 ●教員・学生による地域貢献活動の事例発表（6グループ） ●パネルディスカッション「地域」とつながる「学び」～その成果と課題を考える～
29	COC事業 地域連携フォーラム	◎テーマ：COC研究プロジェクトの成果と今後の事業展開 ●基調講演「地学一体で取り組むCOC事業の成果と課題～共愛学園前橋国際大学の事例から～」共愛学園前橋国際大学 大森 昭生 学長 ●教員、連携の行政・関係機関等による研究プロジェクトの成果発表（子育て支援3件、健康長寿1件、地域力の向上3件）、大森学長等による講評
30	COC事業 地域連携シンポジウム (H31.3.2)	◎テーマ：COC事業の成果と今後の展望 ●基調講演 「地（知）の拠点としての大学への期待～COC事業を振り返って～」 新座市教育委員会 金子 廣志 教育長 「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム—園田学園女子大学COC事業の事例—」園田学園女子大学 人間教育学部 児童教育学科 教授 大江 篤 氏 ●研究プロジェクトの成果報告（子育て支援2件、地域力の向上2件）
27～30	地域志向教育研究費 採択課題成果報告会	●地域志向教育研究費に採択された研究プロジェクトの成果報告会をポスターセッション形式で毎年度実施

◆ COC事業地域連携シンポジウム（平成30年度）

平成31年3月2日(土)、COC事業地域連携シンポジウムを開催し、行政関係者や地域の方々、他のCOC採択大学の教職員、本学の教職員・学生など、約80名が参加しました。本学COC事業が最終年度となったことから、総括として「COC事業の成果と今後の展望」をテーマに実施したものです。

基調講演では、連携自治体である新座市教育委員会の金子廣志教育長と、平成25年度のCOC採択校で本学と大学間連携協定を締結している園田学園女子大学の大江篤教授をお迎えし、ご講演をいただきました。金子教育長からは、「地（知）の拠点としての大学への期待～COC事業を振り返って～」と題して、大学と地域とのWIN-WINの視点から、新座市との連携協力の取り組みの紹介や今後の課題として、地域の教育機関と連携した教育研究の更なる推進や地方再生を図る連携事業の推進などのお話をいただきました。また、大江教授からは、「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム—園田学園女子大学COC事業の事例—」と題して、「まちの相談室」で地域のニーズを発掘し、地域と対話しながら開発した“つながりプロジェクト”や経験値教育、COC事業終了後の取り組みなどを紹介いただきました。

その後の成果発表では、今後も継続発展が期待される地域志向研究プロジェクト4件について、研究代表の教員のほか、研究に参画した本学卒業生や学生、地域の方々にもご登壇いただき、これまで継続して取り組んできた研究の成果と今後の展開について発表していただきました。

最後に、綿井企画担当副学長から、「5年間のCOC事業の取り組みを通して、地域と信頼に基づく顔の見える関係を構築でき、教育研究の中に“地域”という言葉が入ってきたことが大きな成果である。補助期間が終了するが、ここからが地域連携のスタートと思っている。地域との協働という形で、地域の発展と本学の発展をシンクロしながら進めていくことを祈念している。」との開会挨拶がありました。

◆ 日程等 平成31年3月2日(土) 13:30～17:00、会場 本学431教室

◆ プログラム

▷開会挨拶 学長/地域連携推進機構 機構長 志村 二三夫

▷新座市長挨拶 新座市長 並木 傑 氏

▷基調講演Ⅰ

「地（知）の拠点としての大学への期待～COC事業を振り返って～」
新座市教育委員会 教育長 金子 廣志 氏

▷基調講演Ⅱ

「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム—園田学園女子大学COC事業の事例—」
園田学園女子大学 人間教育学部 児童教育学科 教授/企画運営部長 大江 篤 氏

▷研究プロジェクトの成果発表

モデレーター 地域連携推進機構 地域教育開発部門長/メディアコミュニケーション学科 教授 安達 一寿

No.	研究プロジェクト名/研究代表者	共同発表者
1	子ども元気プロジェクト 児童教育学科 准教授 鈴木 康弘	幼児教育学科 准教授 宮野 周 幼児教育学科 4年 大門 日向子 3年 新藤 美波、須見 文香、関口 博子
2	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発 食物栄養学科 講師 金高 有里	食物栄養学科 3年 井上 南美、加藤 伶奈、二階堂 明日香
3	ふるさとの緑と野火止用水を育むプロジェクト 児童教育学科 教授 星野 敦子	ふるさとの緑と野火止用水を育む会 会長 佐藤 弘信 氏 雑木の会 島田 保 氏 新座市グリーンサポーター 横山 勇 氏
4	+ (プラス) ママの子育てサロン 幼児教育学科 教授 上垣内 伸子	+ (プラス) ママ 池田 愛加 氏 (平成18年幼児教育学科卒) 幼児教育学科 助教 渡邊 孝枝 幼児教育学科 4年 橋本 佳奈

▷ 開会挨拶 企画担当副学長兼学長補佐 綿井 雅康



基調講演Ⅰ 金子 廣志新座市教育長



成果発表Ⅰ 「子ども元気プロジェクト」



基調講演Ⅱ 園田学園女子大学 大江 篤 教授



成果発表Ⅳ 「+(プラス)ママの子育てサロン」

VI COC事業評価

3 FD・SD研修

全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めるために、教職員の職能開発のためのFD・SD研修を開催しました。

年度	概要
26	<ul style="list-style-type: none"> ●第1回「補助金申請を通じた大学改革の推進について～COC補助金採択の意義と課題～」日本アスペクトコア(株) ●第2回「地域に+ (プラス) となる大学として」(ワールド・チョコレート・カフェ) ●第3回「地域創りの新たな視点を体感する」本学メディアコミュニケーション学科 松永 修一 准教授 ●第4回「大学マネジメントの高度化と持続可能な地域づくりへの貢献」筑波大学研究センター長 吉武 博通 教授
27	●「地域と大学のパートナーシップを考える」松本大学 住吉 廣行 学長
28	●「宇都宮大学COC事業及びラーニング・ commonsの取り組みについて」宇都宮大学 地域連携教育センター 大森 豊 准教授、他
29	●「知的財産セミナー」みぎのうで(株) 田村 恭佑 氏 (弁理士)、お茶の水女子大学 知的財産センター 北岡 タマ子 講師
30	<ul style="list-style-type: none"> ●「研究活動に着目したコンプライアンス～倫理審査、著作権、企業との関わり方～」みぎのうで(株) 田村 恭佑 氏 ●地域連携推進機構 地域教育開発部門 FD研修会「ジェネリックススキル測定テストPROG測定結果報告」(株) リアセック 灘 成昭 氏

4 広報活動

対象	広報媒体	概要
学内外向け	COC事業パンフレット	<ul style="list-style-type: none"> ●平成26年度 本学COC事業のパンフレットを制作 ●平成29年度 上記パンフレットの改訂版を制作
	COCホームページ	<ul style="list-style-type: none"> ●H26.11.1 COCホームページを開設 ●H28.4 地域連携活動ホームページにリニューアルし、地域連携・社会貢献活動、COC事業、地域連携共同研究所の情報を発信
	COCニュースレター	平成26年度 第1～3号、平成27年度 第4～6号、平成28年度 第7～10号、平成29年度 第11～13号、平成30年度 第14～18号
学内向け	COCセンターニュース	平成27年度 第1～21号、平成28年度 第22～58号、平成29年度 第59～85号、平成30年度 第86～112号

5 ボランティアセンター

ボランティアセンターでは、外部からのボランティアに関する情報を収集・整理・提供し、ボランティアコーディネーターが活動を希望する学生の相談対応やマッチングを行っています。また、学生同士が学科や学年の枠を超えて交流し、ボランティア活動への意欲を高め合う場としても活用され、講座や学習の機会も設けています。

○開室時間 平日10:00～17:00

○役割

- ボランティアに関する情報の収集と提供
- ボランティアに関する相談への対応
- ボランティア学生を求める地域や団体との調整
- ボランティア活動を行うための準備や話し合いの場の提供
- 学生スタッフの育成

(平成30年度の実績)

利用者数(来室者延数)	3,046人(学生2,599人、教職員340人、学外107人)
情報受付件数	166件(情報の内容: ボランティア募集、ボランティア関連の研修・講座、活動情報誌)
活動実績(延人数)	186人
団体等との調整	429件(メール、電話等での需給調整件数含む)
平成30年度 学生スタッフ	22人

1 自己点検・評価

第二期 学校法人十文字学園 中期目標・中期計画の平成30年度計画に対する自己点検・評価の結果

中期目標 (平成28～32年度)	地(知)の拠点整備(COC)事業を始め地域を志向した教育・研究を全学的に推進し、「地域の知の拠点」としての機能を高めて地域社会の更なる活性化に貢献する。	
(注) A: 年度計画達成のための施策や事業の「結果・成果」が出始めている、さらには「評価・改善」プロセスに至っている場合 B: 年度計画達成のための施策や事業が、「実施展開」に移行し、現在進行形で進んでいる場合		
中期計画	平成30年度計画	自己評価・達成状況
地域課題解決を担う学生を育成するため、地域志向科目の拡充など、地域社会への関心と理解を深める取組みを全学的に実施する。	COC事業終了後の地域志向教育カリキュラムの再構築に向けて、現カリキュラムの検証を行い、科目の中で取り組む地域活動をシラバスへ明記し、地域貢献を学びと結びつけたPBL型授業の拡大を図る。また、併せて学生の社会人基礎力の育成に資する、より効果的なカリキュラムの検討を行う。	A ●学生アンケートを実施し、現カリキュラムの検証を行った。また、COC研究プロジェクトの中で、PBL型授業に繋がる取り組みもいくつか実施することが出来た。計画で挙げた地域志向教育カリキュラムの再構築には至らなかったため、今後の課題である。
地域の課題解決のための研究や現職教員等の資質能力向上のための取組みを、自治体や教育委員会等と連携し全学的に推進する。	COC事業の総括として、地域課題解決研究プロジェクトの系統的な整理・集約化を行い、研究成果をより効果的に地域課題に活かせるように自治体との連携強化を検討する。	A ●COC事業を通して、継続的に実施され、地域との連携が明確であり、かつ学生の教育にも貢献しているという観点から、「子育て支援」「地域力向上」「健康長寿のまちづくり」「地域福祉支援」ならびに「教養・芸術」分野から9プロジェクトを平成31年度以降の継続プロジェクトとして選抜した。 ●自治体へのアンケート調査では、研究成果が地域にあまり還元されていないとの回答が半数を占め、市との連携・情報発信が不十分、地域へ情報が伝わる工夫や仕組みづくりが必要などの意見があった。今後、研究活動の成果を地域に分かりやすく伝える情報発信の検討が必要である。
地域の課題解決のための研究や現職教員等の資質能力向上のための取組みを、自治体や教育委員会等と連携し全学的に推進する。	外部機関との連携によるFD・SD研修を実施し、教職員の資質向上を図るとともに地域活動への意識を高める。	B ●COC事業に係るFD・SD研修を次のとおり開催した。職員の資質向上の点については高めることができたが、地域活動への意識を高めることに繋がるような研修は開催できなかった。 ◇「研究活動に着目したコンプライアンス～倫理審査、著作権、企業との関わり方～」みぎのうで(株) 田村 恭佑 氏 ◇地域連携推進機構 地域教育開発部門 FD研修会「ジェネリックススキル測定テスト PROG測定結果報告」(株) リアセック 灘 成昭 氏
学生や教職員の社会貢献活動を全学的に支援する。	COC事業終了後の事業継続に向け、地域社会と大学を繋ぐ拠点として、情報の集積・発信、事業の企画・実施、コーディネートなどを担う対外的な窓口体制・事務組織の構築を検討し、自治体・関係機関等と連携した社会貢献活動の発展・拡大と学生の地域活動への参画拡大を図る。	A ●COC事業の成果を踏まえ、H31以降の組織体制、自治体・関係機関との連携のための会議体等について、次のとおり見直し、検討を行った。 (組織体制) 地域連携推進機構を地域連携推進センターに再編し、同センターに企画・広報部門(本学の地域活動を総括し、戦略的に推進)、プロジェクト研究部門、生涯学習・地域人材育成部門を設置(会議体) 以下のような形で再編を行う。 ◇+(プラス) キャンパス連絡会議…具体的な事業、イベント等のテーマに関連する行政部署、新座市内の団体等と協議を進める。学内の関連する部署、教職員、学生が参加して開催 ◇地域連携協議会…連携市と個別に会議を持ち、地域連携の実情を検証するとともに、具体的な事業の新規立ち上げも含めて協議を実施
地域連携コーディネーター等を継続して配置し、地域連携推進機構の企画、運営、コーディネート、広報機能を強化し、共同研究や自治体等との共同事業等を企画、実施する。	COCニュースレターやホームページ、プレスリリースなどにより、学生や教職員の活動の成果を学内外に積極的に発信する。 企業等との共同研究や自治体等との共同事業を推進するとともに、研究プロジェクト紹介冊子などにより、研究成果を連携自治体に還元するための働きかけを行う。	A ●プレスリリース、COCのHP、ニュースレター、センターニュースなどにより積極的な情報発信に努めた。 ●HP…随時情報更新、ニュースレター…5回発行、センターニュース…27回発行、プレスリリース…5回リリース ●COC研究プロジェクト成果論文集を発行し、自治体等への成果の還元の一助となった。また、次のとおり企業等との共同研究や自治体等との共同事業の取り組みが散見されるが、一部に留まっている。 (共同研究・事業の例) ●産学官連携: 埼玉西武ライオンズ・新座市・本学共催による「親子でベースボール体験」 ●産学連携: 食物栄養学科小林ゼミによる「にんじん・ごぼうドレッシング」の商品開発 ●産学連携: 食物栄養学科金高ゼミによる「からだにベジプラスプロジェクト」 ●官学連携: 星野祐子准教授による定住促進のための新座市PR動画の制作 ●官民学連携: HUGネット(星野 敦子教授)による野火止用水と雑木林の保全活動

2 外部評価

(外部評価委員会での意見等と地域連携推進機構のコメント)

委員からの意見等	意見等に対する地域連携推進機構のコメント
<p>◆総論</p> <p>○COC事業について、思慮工夫され、努力もされていて、大学をある意味では牽引する、評価を高めるといって成果を上げられたことは評価をする。(H30.3.7委員会)</p> <p>○今までの地域貢献活動については高い評価を得ていることから、今後はこの会議で出た提案等を踏まえ議論を進めてほしい。更なる発展を期待する。(H30.9.4委員会)</p> <p>○空き家問題や高齢化問題など、地域のいろいろな課題を大学が指摘して、大学はこういうことができると言える力を持ってほしいと思う。ちょっと待てよ、流れはこっちに来ているぞと言えるような強靱な力を持ち、十文字は一味違うぞという方向にうまくもって行ってほしい。(H31.3.29委員会)</p>	
<p>◆カリキュラム関係</p> <p>○授業科目と地域活動の関連をシラバス等に明記し、学生たちにわかりやすく示す必要がある。(H29.2.8委員会)</p> <p>○修得すべき知識・技能・態度が何であるか、それらの能力と授業科目とがどのように関係しているのか、学生たちがあらかじめ理解できるようにシラバスの内容を充実させること、そのためのFD研修が基本になると考える。(H29.2.8委員会)</p> <p>○授業の最終段階で、自分がどのような力を身に付けたのかを自己評価し、積み残しについて振り返らせ、何が課題となっているのか認識させる機会を設ける必要がある。(H29.2.8委員会)</p> <p>○キャンパス外での体験が新たな学びや課題となり、高い学びになっていると考えているが、学びの中に地域活動を組み込んでいくことが重要である。(H29.2.8委員会)</p> <p>○実際に地域の課題に取り組む学修の充実が望まれる。(H29.2.8委員会)</p> <p>○学生に何を獲得させようとしているのか、教職員が理解していることが必要であり、このことに対する議論を深めていけばよいのではないか。(H29.2.8委員会)</p> <p>○COC事業の地域連携を単なるお手伝いに終わるのではなく、自らの学びとどうリンクさせていくかということが大事である。学生の地域活動が自分の学生としての在り方とどう関わるのか、どういうテーマを持って地域との関わりを進めているのかということ、明確に持ちながら進めていかなければならないと思う。テーマをしっかりと明確に持ちながら、地域連携を進めていくと、まさに地域にとっても、学生・大学にとっても有益なものになっていくのではないかと思うので、その方向を見失わずに進めていただきたい。(H30.3.7委員会)</p> <p>○学生が自分の取り組んだ活動について、自身で結果を検証し、他者からの評価を受け止めて、それを力にして社会に出ていただきたい。(H30.3.7委員会)</p> <p>○地域志向教育は、主に新座市を中心としているが、思考力や具体的方策などを学修させる意味では、いずれの地域でも通用する汎用性の高い事業であり、これを深めていかなければならない。COC事業の総括の中でこれを明示しておく必要がある。(H30.3.7委員会)</p> <p>○振り返り授業は極めて重要であり、グループや全体構造の中で、自分のやったことを振り返り、組織的に行われているのか、きちんとした形で体系的に整理されているのか、ということや学生一人一人が反省し、今後に生かしていくことが大事で、それが汎用性のある思考力、行動に繋がってくると思う。そういった観点では、学生の授業評価を通して、学生の反応を考慮に入れながら考えてほしいと思う。(H30.3.7委員会)</p>	<p>→平成28年度は三つのポリシーを見直し、学科単位で専門教育部分のルーブリックやカリキュラムマップの開発を完了させた。ディプロマ・ポリシーと各授業科目との関連、学科の人材育成目標、授業の達成目標を設定し、シラバスに反映していく作業に取り掛かっている。運用は、eポートフォリオ（自己評価機能）を活用しており、年度初めに学生が個人の目標を設定し、年度末にはその目標の達成度について自己評価をさせている。全学科・全学年で展開できていないことが課題である。</p> <p>→COC事業がスタートした時の1年生が、今ようやくゼミ活動に入り、専門的な活動や勉強を進めている時期に来て、そのような片鱗が出てきている。具体的には、食物栄養学科の学生が食の意識や食生活の改善のための専門知識を活かした子どもと保護者向けの教材を考案し、新座市のココフレンド（子どもの放課後居場所づくり事業）で子どもたちへの食育活動を行った。いろいろな地域活動に関わり地域を学んだ学生たちが、専門のゼミに入ったときに、専門を活かして自ら発案できるように、検証していきたいと思う。</p>

委員からの意見等	意見等に対する地域連携推進機構のコメント
<p>○地域を活性化させるためにはグローバルな視点からのモノの見方・考え方が非常に大事であり、今後は益々その傾向が強くなる。グローバル化が進むほど、競争ではなくて、協調や協働などの問題になり、地域性を育てる教育と国際性を育てる教育を、調和的に、総合的に行う必要がある。国際性を育てる教育をどうするのかということについて、COC活動の中で考えていただきたい。その際、日本人学生と留学生と一緒にチームを組んで地域で活動することで、日本人学生は、外国人学生がどう思うか、どう行動するかということや学ぶだろうし、なんらかの形で、そういった学習の可能性を検討してほしい。(H30.3.7委員会)</p> <p>○教養教育と専門教育との連携は極めて大切である。「地域を学ぶ」科目で知識を育て、各々の専門と関連付けながら、「地域に活かす」科目で地域の具体的な課題に取り組むなどの実践的な活動を行う。主体的な学びを、時系列で振り返り、地域に学ぶ、地域に活かすという行動化し体系化することで、様々な地域において適応でき、思考力や判断力を身につけることができる。(H30.9.4委員会)</p> <p>○十文字が目指すものの1つとして、街づくりや地域活性化への貢献がある。そのためには、地域に活かす科目をいかに充実するか、重要な課題である。街づくりや活性化を考えた時には、具体的な政策立案、政策評価ができることが大事であり、知識や経験を修得できるような科目を用意する配慮が必要である。(H30.9.4委員会)</p> <p>○松本大学では、どのプロジェクトにおいても、学んでいるプロセスを通じて専門性を獲得し、課題解決型の能力に必ず結びつくような教育システムとして実施していることをアナウンスしているため、学生も理解してやっている。ただ勉強しているだけでなく、最後は政策立案までこぎつける、地域の活性化につながったという成果を出すような指導を行っている。学生の能力を身に付けるための場（フィールド）として地域を活用している。(H30.9.4委員会)</p> <p>○学びを通して、どのような学生を育てようとしているのか、課題探求力を身に付けるために大学があり、どういう力が身につくのか示すのが十文字学の在り方ではないか。(H30.9.4委員会)</p> <p>○分からないことを分かるようにするのが研究者であり、学生に研究者と同じことをやらせる。分かっていることを覚えて実行するのはなく、研究者と同じようにプロセスを踏ませることで、力が身につくのではないかと思う。(H30.9.4委員会)</p> <p>○地域志向科目の地域を学ぶ授業の中に、この大学の幅広い世代の卒業生に講師として協力いただいているのは素晴らしいアイデアだと思う。(H31.3.29委員会)</p> <p>○学生が地域連携活動を通じて、今まで気づけなかった自分の専門科目、学問の面白さ、奥深さに気づけたのかという点について、どのように考えているのか、見解を聞きたい。(H31.3.29委員会)</p> <p>○日本社会全体でいえば、単に知識を覚えるだけでなく、柔軟で多様な視点を持ち、課題を見つけ出し解決していく、そういった考える人材が求められている。多様性の視点から考えると、COC事業に海外の留学生を参加させ、日本の学生と一緒に活動することに大きな意味があるのではないかとことを是非考えてほしい。(H31.3.29委員会)</p> <p>○PBL的な地域に密着した形の教育を行っていることは、大変重要なことと思うが、今後何年間で、どうするのかという見通しを持った上で取り組むことが大切である。(H31.3.29委員会)</p>	<p>→地域に貢献できるようになりたいという目標を持つ学生と、大学のカリキュラムを通して結果として身についた学生が混在する。どちらが適切であるかは決められないが、今後についてアドバイスをいただきたい。学生の自覚、自立を促す上でコンピテンシーを見ながら進めている。最後には活かせる場を作ってあげたいと考えている。</p> <p>→COC事業で経験した様々な取り組みを、自分の学んでいる学問の分野の専門性を追求して卒業論文としてまとめた学生がかなり出てきていると評価している。また、地域志向科目の授業を通じて、学生が講義に関係する地域活動に参加する際には、例えば食物栄養学科や幼児教育学科などの専門性を活かした活動となるように学科を限定するなどの配慮も行うことにより、専門分野のプロとして活動しているという学生の意識も高まっている。</p> <p>→地域連携に関しては、COC事業の次のステップとして5年間を一つの目安と想定している。新体制の中でできるだけ高い成果が得られるような活動を展開し、学生の成長もデータを蓄積しながら卒業までの成果を見ていく5年間としたい。</p>

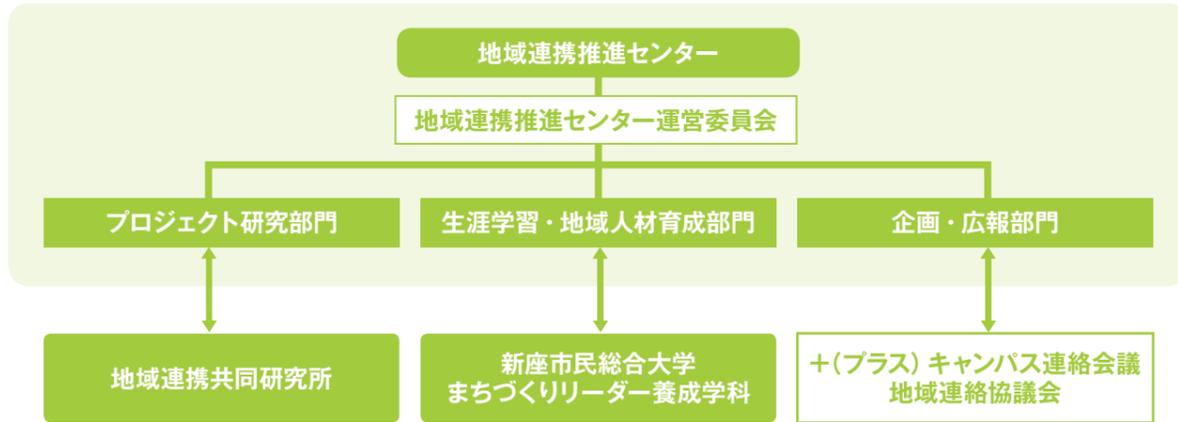
委員からの意見等	意見等に対する地域連携推進機構のコメント
<p>◆地域活動の学修成果の評価</p> <p>○学生の地域活動による能力伸長が外部に示していけるとよい。その視点での評価基準がほしい。(H29.2.8委員会)</p> <p>○地域活動に参加した学生の成長の仕方という視点での評価基準がほしい。(H27.6.10委員会)</p>	<p>→社会人基礎力測定のためのPROGを導入して、その分析評価をもとにルーブリックによる評価基準を設定し、管理ツールであるeポートフォリオを導入し、学びのPDCAの記録を行っている。</p> <p>→平成28年度後期開講科目「地域で学ぶ」では、ワークシートを活用し、受講開始時の学生の基礎力を把握した上で、この授業を受講することで身に付けたい力、そのための計画を学生自身に考えさせ、ルーブリックに照らした能力育成を試行している。また、集団活動や話し合いなども取り入れている。受講生はほとんどが1年生であり、この学生たちのデータをもとに、本科目未受講の学生と比較・分析していくことで、地域活動による学修成果を提示できると考えている。</p> <p>→「自主社会活動」では、学生の自己評価アンケートとeポートフォリオでの自由記述文の分析をおこない、評価ツールとしての妥当性を検討している。</p>
<p>◆研究プロジェクト関係</p> <p>○研究者各人がそれぞれに活動し、いろいろな研究が乱立している状況になっている。俯瞰して体系的に整理することで、実質的な地域貢献に繋がる研究になりうるのではないかと。(H28.6.24委員会)</p> <p>○地域の課題の捉え方について、もう少し総合的な視点も含めながら、体系的に取り組んでいく必要があると思う。それにより、基礎的な研究と具体的な地域での活動が繋がり、お互いにフォローし合っていくようになると、非常に意味が出てくると思う。また、地域貢献活動の構造化を行い、学生にとっての活動の意味を言ってあげることが必要との印象を受けた。(H30.3.7委員会)</p> <p>○地域連絡協議会等での地域からの要望と、それに対する対応など、課題と成果、推進方法などについても示してほしい。(H30.3.7委員会)</p> <p>○新座を対象としているいろいろな角度から地域の課題を解決しようとしていることは面白いが、総花的であり、教員主導になってはいないか。学生は自ら疑問を持った時や、様々なプロジェクトに参加する中で解決方法を見つけた時に成長するので、複合的にプロジェクトを繋げていくことが重要である。(H30.9.4委員会)</p> <p>○研究プロジェクトは、当初多くの教員が関与し、その中でプロジェクトが絞られてきたとのことだが、知の伝承として、地域連携を若手の教員も含め継続していくために、FDを実施したり、地域連携のコツを学内で伝承していくことが重要になってくるのではないかと。(H31.3.29委員会)</p>	<p>→継続的に取り組まれてきた研究プロジェクトの実績から、本学のシーズを活かすことができる地域課題が明確となってきた。今後は、個別研究を地域課題毎に紐つけた研究プロジェクトの集約化が必要であり、そのために、研究分野ごとに新座市との会議体を設置して連携を深めるなど、研究成果を自治体の施策に反映できる仕組みづくりを進めていきたい。</p> <p>→プロジェクトへの複合的な参加という観点から「プラキャン基礎ゼミ」という新しい科目を立ち上げ、学科の枠を超え、様々なプロジェクトへの参加を通しての学びを検討している。</p>
<p>◆地域活動関係</p> <p>○地域活動が単なる「お手伝い」ではなく、学生の創意・工夫が活かされる活動に変化してきており、学生の発想が具現化される活動になるよう取り組んでほしい。今後期待したいのは、これまで行政側も手掛けていなかったような事業を見つけることである。(H29.2.8委員会)</p> <p>○市民参加やNPOでも街づくりについて議論されており、若い優秀なファシリテーター等を育成している。その方たちの話を聞くと、学生は関心があるのではないかと。また、他大学の学生と企画に参加させ、相互に刺激し合いができる環境を意図的に作ってもよいのではないかと。(H30.9.4委員会)</p> <p>○三芳町とも包括連携を結んでほしいと思う。会社や工場など沢山あることから、見学ではなくインターンシップとして入ってほしい。学生からの指摘は、会社にとって刺激が大きい。学生にも大学での学びが社会に出て役に立つということを知る良い契機になると考える。(H30.9.4委員会)</p>	<p>→地域活動には3つのタイプがある。1つ目が既存の活動に学生が参加することで活性化するもの、2つ目が行政や団体からの要請によるもの、3つ目が行政もまだ気付いていない本学独自の取り組みによるものである。3つ目の活動を増やしていきたい。</p> <p>→「野火止水灯明まつり」の支援を通して、埼玉県内のボランティアサークルの連携組織「わかたま」と活動を共にしている。また、園田学園女子大学と協定を結んでおり、十文字のふるさと支援隊(中山間支援)の活動と園田学園の兵庫県内の中山間支援活動を両大学の学生が参加し、本格的な学生交流を行っている。その成果を今後の活動に活かしていきたい。</p> <p>→行政の会議でも若い世代が加わると、新しい視点から有効な意見が得られる。そのような人材に学生を育てていきたいと考えている。</p>

委員からの意見等	意見等に対する地域連携推進機構のコメント
<p>◆COC事業と地域との関わり</p> <p>○COC事業の5年間の取り組みの姿容を地域とのかかわりの観点から見ると、既存の様々な事業への参加から始まり、今や自主的な事業の展開が図られているところまで成長してきたかなと思う。また、教員養成については、大学1年生から学校現場に出て学んでいくシステムを確立し、埼玉県内で3番目に数えられる多くの教員を輩出している実績を上げたことは、COC事業の成功例とみている。大学の専門性を活かしていく意味においても、新座市が進める子ども大学にいざや新座市民総合大学の一翼を担い、多くの市民が大学で学ぶ機会を得たこともCOC事業の大きな成果で、COC事業の目的を十分達成できたと思う。今後は、大学の専門性をどう地域連携に生かしていくかというステップアップが必要と思う。このステップアップの一つは、専門性を活かした継続的な研究と地域連携をどう結び付けていくのがテーマになると思う。例えば、健康や食の問題をトータルに考えながらプロジェクトを組んで高齢化社会に貢献できる、一歩進んだ地域連携が可能になると思う。もう一つのステップアップとして、市民の学びたいニーズに応えるためのリカレント教育のシステムを是非大学で確立してもらえるとありがたいと思っている。(H31.3.29委員会)</p>	
<p>◆情報発信</p> <p>○地域連携の活動が、シニア世代にも届くように情報を発信してほしい。(H30.9.4委員会)</p> <p>○COC事業終了後は、地域連携推進センターに企画広報部門が設置されるが、情報発信にあたっては地域のニーズを取り入れ双方向性にしていくことが重要である。また、大学教員や地域だけでなく高校生の声など、これからの地域を担う人材を大学が繋ぎながら育成していくこと、どうやって地域の高校生が十文字に来たいと思うような循環を作っていくかが非常に重要であると思う。(H31.3.29委員会)</p>	<p>→情報発信の最大の課題は、高校生世代で、そのニーズをどう受け止め、発信していくかに尽きる。募集広報部門と連携をとりながら、YouTubeやLINEなどのSNSを活用して双方向の情報やり取りを行い、十文字に好意を持ってくれるファンを出来るだけ増やしていきたい。</p>
<p>◆市の将来コンセプトとの関連</p> <p>○大学が地域に貢献し、それが教育に繋がることは、素晴らしいコンセプトだが、新座市の将来コンセプトに大学が位置付けられ、大学と市のコンセプトが融合する形で地域の共生の一つの柱になるとよいと考える。(H27.6.10委員会)</p> <p>○新座市のまちづくりの将来に向けてどう提起していくかという部分が欠けていると思う。計画的な視点と、提案的な視点を持って踏み込んでいくことが非常に大事ではないかと思う。(H30.3.7委員会)</p>	<p>→新座市地方創生総合戦略には、地方創生に活かせる新座市の強みの一つとして「市内3大学(跡見学園女子大学、十文字学園女子大学、立教大学)」を掲げ、地方創生の施策として「大学との連携事業拡充」を位置付けており、本学のCOC事業と新座市の地方創生のコンセプトが融合して、地域再生の一つの柱となっている。</p> <p>→新座市の新座快適みらいプロジェクトへの本学の学生の参加など、ご指摘のような動きが出てきている。COC大学として、もっと積極的に大学からそういった活動を進めていきたいと思う。</p>
<p>◆COC事業終了後の計画</p> <p>○来年度が最終年度となるが、現段階でCOC事業終了後の活動の在り方などの基本線が決まっておらず、計画性が足りない部分があると思う。それによって、将来の予算をどう確保していくのかといった流れに繋がっていく。(H30.3.7委員会)</p> <p>○この地域の中で大学がCOCをやりながら、どんな世界を作り上げていきたいのか、その姿を一度描いてみるべきと思う。強点と弱点、脅威と機会といった観点から、将来像に向けて、我々はいま何者であるのかがまさに出発点になると思う。将来の在りたい存在に向けて、十文字と地域の方を含めて、どのようなベクトルで進んでいくのか、そうすると色々な多彩な授業の中で、この部分は落としてもいいのではないかと、この部分はもっとお金をかけなくてはいけないとかももっと見えてくると思う。そういう流れの中で、地元にも貢献できるCOCというものを作り上げていく。それは逆に、持続性があるって、将来に向かって、長年に亘ってできる事業になり得ると思う。ぜひ長い目でそういった基本プランを作っていたいただきたい。(H30.3.7委員会)</p>	

Ⅶ COC終了後の組織体制

1 組織の改編

5年間のCOC事業の取り組みを通して培った経験や知見を活かし、より広域的な地域連携活動と効果的な情報発信を通して、地域貢献大学との認知度を高めていくため、2019年4月1日付けで地域連携推進機構を地域連携推進センターに改編し、同センターにプロジェクト研究部門、生涯学習・地域人材育成部門、企画・広報部門を設置しました。



2 新組織体制のねらい

プロジェクト研究部門 (地域連携共同研究所)	新座での活動の成果を生かし、さらに広域での活動を展開していくことにより、本学の知名度を高めることにつながる活動を中心に、プロジェクト型研究を進めていく。また、年度ごとに活動成果を検証し、プロジェクトの改善を図るとともに、新プロジェクトの開発を進める。各プロジェクトにおいては、特に学生の教育との関連を重視し、広域で学生の活動を展開することにより、本学学生の姿を広く発信するとともに、学生の社会リテラシーの向上につなげる。
生涯学習・地域人材育成部門	公開講座、彩の国大学コンソーシアム、子ども大学、リカレント教育など、従来の活動に加え、地域に対する本学のシーズを活かした人材派遣を積極的に行う。公開講座については、語学やパソコンスキルなど、有料の継続型講座を導入することと、高校生や保護者を対象とした募集につなげる講座を開講する。会員登録をして申し込む方法を取り、登録者の蓄積を図るような手法をとりたい。 また、新たな地域人材育成手段として、新座市「市民総合大学」として「地域学部まちづくりリーダー養成学科」を立ち上げた。本学科は、①これからの地域を支える人材の育成 ②有為な人材が力を発揮できる組織の継続と創設 ③組織をリードし、支えるリーダーの育成の3つを目的としている。商工会、商工会青年部、町内会、青年会議所、農協など、地域団体との連携を行い、学生が活動に参加できる仕組みを構築していく。
企画・広報部門	本学における地域活動を総括し、戦略的に推進するための部門を立ち上げ、地域活動、研究に関わる情報発信を積極的に行うとともに、地域にニーズを受け止める窓口として、企業や行政、市民団体などと研究活動のマッチングを行う。とくに、SNSの組織的な活用、YouTubeを利用した動画発信など、高校生世代、また保護者の世代にマッチした、感性を生かした情報発信を推進する。そのための1つの提案として、「学生広報部」(プラスガールズ: 仮称) といった組織により学生主導の広報を実現することも有効であると考え。

Ⅷ 資料

1 新聞掲載記事

年度	新聞	掲載記事
26	埼玉新聞 H27.2.26	28日に地域と大学活性策探るシンポ 十文字女子大と新座市
	毎日新聞 H27.3.1	大学と地域の連携を考える 新座でシンポ
	埼玉新聞 H27.3.2	大学と地域連携考える 新座 十文字女子大がシンポ
27	信濃毎日新聞 H27.11.10	私の大学自慢はここ 松本大で9大学参加のコンテスト(本学参加)
	埼玉新聞 H28.1.9	いたずら通報ダメ!! 新座で十文字女子大生が一日署長
	東京新聞 H28.2.27	新座の伝説歩こう 十文字学園女子大生がマップ製作
	朝日新聞 H28.3.1	世にも奇妙な新座の地図 市に贈呈「魅力発信 役立てて」… 十文字学園女子大生ら、市内の伝説たどり作製
	埼玉新聞 H28.3.4	妖怪伝説 巡り歩いて 十文字女子大生 新座「ふしぎマップ」発行
28	埼玉新聞 H28.8.15	新座の妖怪集めて あすからスタンプラリー 産学連携でイベント
	朝日新聞 H29.1.16	野火止用水に樹木マップ 新座の「育む会」、市に1000部を寄贈(本学COC研究プロジェクト「ふるさとと緑と野火止用水を育む会」)
	東京新聞 H29.2.25	新座で楽しむおしゃれ 若者向けファッション誌 十文字学園女子大 学生たちが作成
	文教ニュース H29.3.6	宇都宮大学、十文字学園女子大 キャラクターによる大学間交流
	埼玉新聞 H29.3.17	高齢者と学生コラボ 十文字学園女子大 商店街のファッション誌製作
	日本農業新聞 H29.4.27	JAあさか野 新座産ニンジンでドレッシング 学生と開発・販売
29	埼玉新聞 H30.1.18	私たちの気持ちに 十文字学園女子大生ら 被災地と新座食材をコラボ オリジナルスイーツ考案
	東京新聞 H30.1.19	熊本産食材で特製スイーツ 被災地復興を支援 十文字学園女子大生ら開発 明日、新座で販売 現地で特徴、作り方学ぶ
30	埼玉新聞 H30.9.26	ふるさどにいざ・オータムコンサート(開催案内)
	朝日新聞 H30.12.5	けっぱれ北海道 弁当で支援 新座の大学生ら、地元食材たっぷり(からだにベジプラスプロジェクト)
	東京新聞 H30.12.5	新座 十文字学園女子大生 北海道地震被災地のために 復興支援の手づくり弁当(からだにベジプラスプロジェクト)
	毎日新聞 H31.1.26	児童に選挙啓発 新座で出前講座 市と十文字女子大
	埼玉新聞 H31.2.2	「選挙って?」児童に解説 十文字学園女子大生が出前講座 新座市選管と連携
	東京新聞 H31.2.20	地産野菜シリーズ第2弾 新座のコボウ ドレッシングに 十文字学園女子大生たちが商品化
	埼玉新聞 H31.2.26	地域のスマイル: 十文字学園女子大による地域連携(シリーズ) ① 2017.5.5 HUGネット 市民・行政・大学の連携で緑と活力のあるまちづくりを! ② 2017.6.5 志木駅周辺でも活動中! 駅前クリーン活動に参加! 6月にはほっとぶらさで無料のカフェを出店 ③ 2017.7.5 十文字学園女子大ふるさと支援イベント「神川発! オーガニックなタベ」 ④ 2017.8.5 スポーツも頑張ってます! 「FC十文字VENTUS」に注目! 初のバレーボール大会も開催! ⑤ 2017.9.5 黒目川で小学生が魚とりや水質検査 COC事業で子どもの自然体験活動を開催! ⑥ 2017.10.5 「愛の告白タイム」も? 10月8日に「新座市産業フェスティバル」で大声コンテスト ⑦ 2017.11.5 「ふるさと支援隊」(中山間部支援活動) 旧神泉村(児玉郡神川町)でオーガニックツアーを開催! ⑧ 2017.12.5 HUGネットが子ども自然体験を開催 雑木林散策と炭焼き体験に夢中! ⑨ 2018.1.1 1月18日(木) から4日連続 十文字の森でプレーパークを開催! ⑩ 2018.2.5 新座市栄四丁目餅つき大会に参加 お餅つきにも挑戦!
	埼玉新聞 H31.2.26	ふるさどにいざ・オータムコンサート(開催案内)
	朝日新聞 H30.12.5	けっぱれ北海道 弁当で支援 新座の大学生ら、地元食材たっぷり(からだにベジプラスプロジェクト)
	東京新聞 H30.12.5	新座 十文字学園女子大生 北海道地震被災地のために 復興支援の手づくり弁当(からだにベジプラスプロジェクト)
毎日新聞 H31.1.26	児童に選挙啓発 新座で出前講座 市と十文字女子大	
埼玉新聞 H31.2.2	「選挙って?」児童に解説 十文字学園女子大生が出前講座 新座市選管と連携	
東京新聞 H31.2.20	地産野菜シリーズ第2弾 新座のコボウ ドレッシングに 十文字学園女子大生たちが商品化	



(十文字学園女子大学メディアコミュニケーション学科の学生)

フォーユー
FOR YOU
 男女共同参画社会の実現に向けて
 男女共同参画情報誌 第48号
 ~若者が考える 男女共同参画社会 Part4~

男女共同参画社会をどう実現していくか、若い人たちにも関心を持ってもらいたいという願いを具体化するために、十文字学園女子大学メディアコミュニケーション学科・石野榮一教授の協力を得て、同大学の学生に市内の職場で働く方々にインタビューをしていただきました。

◆**保育士 浅田理一さん**
 浅田さん、保育士として働いていて、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 浅田さん そうですね、保育士として働く上で、男女共同参画社会が実現すると、子育てが楽になると思います。例えば、男性が育児休暇を取ると、ママの負担が減りますし、子どももパパと過ごす時間が多くなるので、子どもにとってもいいと思います。



夢を実現するために両親が背中を押してくれた
 北野の森保育園 保育士 浅田理一さん

◆**保育士 山腰拓実さん**
 山腰さん、保育士として働いていて、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 山腰さん そうですね、保育士として働く上で、男女共同参画社会が実現すると、子育てが楽になると思います。例えば、男性が育児休暇を取ると、ママの負担が減りますし、子どももパパと過ごす時間が多くなるので、子どもにとってもいいと思います。



◆**保育士 山腰拓実さん**
 山腰さん、保育士として働いていて、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 山腰さん そうですね、保育士として働く上で、男女共同参画社会が実現すると、子育てが楽になると思います。例えば、男性が育児休暇を取ると、ママの負担が減りますし、子どももパパと過ごす時間が多くなるので、子どもにとってもいいと思います。

◆**インタビュー者**
 インタビュー者として、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 インタビュー者 そうですね、男女共同参画社会が実現すると、社会がより公平になると思います。例えば、男女の賃金格差が縮小され、女性が活躍の場が広がることで、社会全体の生産性が高まると思います。

◆**インタビュー者**
 インタビュー者として、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 インタビュー者 そうですね、男女共同参画社会が実現すると、社会がより公平になると思います。例えば、男女の賃金格差が縮小され、女性が活躍の場が広がることで、社会全体の生産性が高まると思います。

自分の知識を 市民の方のために活かしたい
 新座市役所 建設課 技師 鈴木達子さん

◆**技師 鈴木達子さん**
 鈴木さん、技師として働いていて、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 鈴木さん そうですね、技師として働く上で、男女共同参画社会が実現すると、仕事もやりやすくなると思います。例えば、男性が育児休暇を取ると、ママの負担が減りますし、子どももパパと過ごす時間が多くなるので、子どもにとってもいいと思います。

◆**インタビュー者**
 インタビュー者として、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 インタビュー者 そうですね、男女共同参画社会が実現すると、社会がより公平になると思います。例えば、男女の賃金格差が縮小され、女性が活躍の場が広がることで、社会全体の生産性が高まると思います。

◆**インタビュー者**
 インタビュー者として、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 インタビュー者 そうですね、男女共同参画社会が実現すると、社会がより公平になると思います。例えば、男女の賃金格差が縮小され、女性が活躍の場が広がることで、社会全体の生産性が高まると思います。

◆**インタビュー者**
 インタビュー者として、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 インタビュー者 そうですね、男女共同参画社会が実現すると、社会がより公平になると思います。例えば、男女の賃金格差が縮小され、女性が活躍の場が広がることで、社会全体の生産性が高まると思います。

◆**インタビュー者**
 インタビュー者として、男女共同参画社会についてどう思いますか？
 インタビュー者 そうですね、男女共同参画社会が実現すると、社会がより公平になると思います。例えば、男女の賃金格差が縮小され、女性が活躍の場が広がることで、社会全体の生産性が高まると思います。

NIFAだより
 Niiza International Friendship Association
NIFA
 第58号
 新座市国際交流協会 2018年12月



国際交流デーを開催しました



国際交流デー実行委員長挨拶
 「11月11日、国際交流デーが開催されました。天候もよく多くの方々に来ていただき、誠にありがとうございました。本年度も国際交流の一環として外国諸国の料理を販売し、ステージでは観客参加型のオーケストラ演奏で盛りまりました。また十文字学園女子大学の留学生も協力していただき、とても活気溢れる楽しい一日となりました。ご協力いただいた多くの方々に感謝申し上げます。来年は新しい市役所庁舎広場で行う予定です。訪れる方も、開催側も楽しんで交流できる国際交流デーを目指しておりますので、来年も是非足を運んでいただければ幸いです。」
 山腰 拓実

国際交流デーに揚げ春巻きを出店していただいた十文字学園女子大学の留学生に感想をいただきました！
 ベトナムと日本をはじめ、各国の食文化を通じた交流ができて嬉しかったです。「ベトナムへ行きたい」とか「アオザイが綺麗ですね」と言ってくれました。私たちにとって有意義な国際交流の機会になり、皆さんの沢山の笑顔を見て元気になりました。今後も交流の懸け橋になるように頑張ります。
 十文字学園女子大学 大学院 国際栄養学研究室
 ヅウ テウイ リンさん



**～東京2020オリンピック・パラリンピック～
 新座市はブラジルのホストタウンPR活動をしました！**

平成30年11月23日(金・祝)「くみまちモール新座」にカインズ(CAINZ)新座店がオープンしました。
 森田会長他7名でチラシ500部を13時半には全て来店者に手渡しました。「ブラジルのホストタウンなの？」とビックリする方もいて、PR活動の効果がありません。
 屋上の駐車場からは雲一つない晴天の中、富士山が美しい姿を見せていました。またこの夜、藤原道長が「この世をばわが世とぞ思ふ望月の・・・」と詠んでからちょうど1千年後の満月が方角昇った、記念すべきイベント日でした。



3 自治体等のホームページ

新座市	埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学共催事業「親子で体験!野球教室」を開催しました(2017.10.26掲載)
	東野ココフレンドで十文字学園女子大学学生による食育講座を実施しました(2017.11.12掲載)
	埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学共催 幼児向けイベント 親子でベースボール体験を開催しました(2018.1.22掲載)
	埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学共催 幼児向けイベント 親子でベースボール体験 を開催しました(2019.1.23掲載)
志木市	「おいしく減塩!『減らソルト』フェスタ」を開催しました(2017.12.4掲載) 本学健康栄養学科、食物栄養学科の教職員が協力参加
埼玉県	県政ニュース 「県南西部の見どころを巡る自転車ツアー参加者募集～十文字学園女子大学生と共同でコース開発!～」 埼玉県南西部地域の自転車活用による地域づくり事業実行委員会(7市町・7市町商工会・3NPO団体・埼玉県南西部地域振興センターで構成)では、サイクリングを楽しみながら、ボランティアガイドと一緒に埼玉県南西部の見どころを巡る自転車ツアーを実施します。なお、今年は初の試みとして、十文字学園女子大学(新座市)の学生が企画段階から参加し、女子学生の若い目線で、新たに2つのコースを開発しました。これまで当企画への参加が多かった中高年層はもちろん、若い世代も楽しめるようなコースです。(2017.8.29掲載)
	「埼玉県南西部の見どころを巡る自転車ツアー～十文字学園女子大生推薦!グルメ・パワースポットコース」 南西部管内7市町・7市町商工会・NPO団体・南西部地域振興センターで構成される「埼玉県南西部地域の自転車活用による地域づくり事業実行委員会」では、毎年自転車ツアーを行っています。今回、昨年十文字学園女子大生が開発したコースを学生が実際に巡って自転車ツアーをPRするための動画を撮影・編集しました。(2019.2.21 You Tubeで公開)
埼玉西武ライオンズ	十文字学園女子大学 授業研究会/十文字学園女子大学との連携協力に関する基本協定に基づく協働事業として実施しました(2017.5月地域活動レポート)
	WFPウォーク・ザ・ワールドinメットライフドーム/連携協定を締結している埼玉医科大学、十文字学園女子大学、駿河台大学の学生が運営スタッフとして参加いたしました(2017.6月地域活動レポート)
	新座市・十文字学園女子大学共催親子で体験!野球教室/新座市とのフレンドリーシティ連携協力に関する基本協定協働事業、十文字学園女子大学との連携協力に関する協働事業の一環として実施しました(2017.10月地域活動レポート)
	新座市・十文字学園女子大学「親子でベースボール体験」/新座市とのフレンドリーシティ連携協力に関する基本協定協働事業、十文字学園女子大学との連携協力に関する協働事業の一環として実施しました(2018.1月地域活動レポート)
	平尾、吉見アカデミーコーチが先生役に「ベースボール型授業」を指導!(2018.5.23) /十文字学園女子大学と連携協定の一環として、児童教育科1年生90名を対象に授業研究会を実施。日頃、小学生児童を対象に行っている「ベースボールチャレンジ」(野球振興プログラム)を体験いただきました。ゲーム形式では、小学生に負けにくい大変盛り上がり、将来は幼児教育指導に役立てていただければと思います。(2018.5月L-FRIENDSレポート)
	新座市立大和田公民館で親子対象の野球体験を実施!(2019.1.19) /新座市とのフレンドリーシティ連携協力および十文字学園女子大学との連携協力に関する協働事業の一環として、新座市立大和田公民館にて野球未経験の幼児向け親子野球教室を実施しました。ライオンズアカデミーの石井コーチ・吉見コーチと一緒に、投げる・捕る・打つの基本を練習し、最後はみんなで試合形式を楽しみました! 打つ時間は十文字学園女子大学の学生たちが中心となり企画・指導を行い、こどもたちと共に楽しんでいる姿が印象的でした。(2019.1月L-FRIENDS レポート)

4 その他のメディア

テレビ局	放送日	放送内容
NHK総合	2018.1.20	【首都圏ニュース】 1月20日開催の十文字元気プロジェクト「くまプラスウィーツプロジェクト～熊本復興&新座活性化!!～」イベント
TBS	2017.4.4	【白熱ライブ ビビット】 ファッション誌「LADY BARBA」で商店街振興 平成28年度地域志向教育研究費採択研究プロジェクト:シャッター街で考える心理学的地域振興(人間発達心理学科講師 東畑開人)において制作したファッション誌「LADY BARBA」をとりあげ放映
テレビ埼玉	2017.9.14	【ニュース930】～フィンランド発の子育て支援「ネウボラ」が埼玉で～ 平成29年度地域志向教育研究費採択研究プロジェクト:親の主体的な子育てを可能とする地域支援の在り方の検討(幼児教育学科教授 向井美穂)において実施した9月9日の「ネウボラ国際シンポジウム」を放映
	2018.1.20	【ウィークエンドニュース】 1月20日開催の十文字元気プロジェクト「くまプラスウィーツプロジェクト～熊本復興&新座活性化!!～」イベント
J:COM	2016.4.22	【ディリーニュース(練馬・新座・和光エリア)】 西武ライオンズとの連携協力に関する基本協定の締結
	2016.12.6	【ディリーニュース(練馬・新座・和光エリア)】 本学COC事業シンポジウム
	2017.1.25	【ディリーニュース(練馬・新座・和光エリア)】 本学COC事業研究プロジェクト/ふるさと新座館ホールピアノ体験事業
	2017.10.23	【ディリーニュース(練馬・新座・和光エリア)】 10月21日開催の埼玉西武ライオンズ・新座市・本学共催事業「親子野球教室」
	2017.12.4	【ディリーニュース(練馬・新座・和光エリア)】 12月2日開催の十文字元気プロジェクト「プラスちゃんといっしょ」イベント
	2018.1.20	【ディリーニュース(練馬・新座・和光エリア)】 1月20日開催の十文字元気プロジェクト「くまプラスウィーツプロジェクト～熊本復興&新座活性化!!～」イベント
J:COM	2019.1.18	【ディリーニュース(練馬・新座・和光エリア)】 1月17日に実施した「+(プラス)ママの子育てサロン」 平成30年度地域志向教育研究費採択研究プロジェクト:乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業「+(プラス)ママの子育てサロン」開催と有効性の検討(幼児教育学科教授 上垣内伸子)において取り組む「+(プラス)ママの子育てサロン」の活動を放映



埼玉県南西部地域振興センター (2019.2.21 You Tubeで公開)

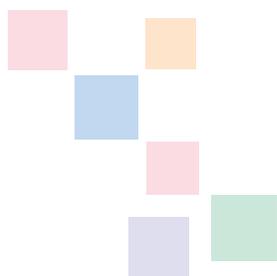


埼玉県南西部の見どころを巡る自転車ツアー～十文字学園女子大生推薦! グルメ・パワースポットコース～

地(知)の拠点整備事業 平成26～30年度 最終報告書

新座市をキャンパスに！+（プラス）となる人づくり、街づくり

- ◆【発行日】 令和元年8月
- ◆【発行】 十文字学園女子大学 地域連携推進センター
- ◆〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
TEL 048-477-0555 (代表) FAX 048-478-9367



本学マスコットキャラクター
プラスちゃん

十文字学園女子大学 地域連携推進センター

〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28

TEL. 048-477-0555 (代表) 048-477-0958 (直通)

FAX. 048-478-9367

URL. <http://www.jumonji-u.ac.jp/>